長崎県文化財調査報告書　第173集

森岳城跡 II

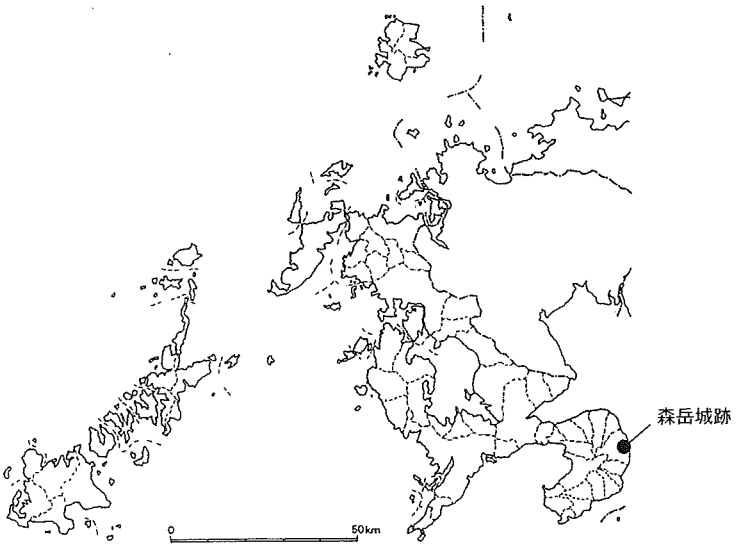
－ 県立島原高等学校浄化槽移設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 －

２００３

長崎県教育委員会

森 岳 城 跡 Ⅱ

－ 県立島原高等学校浄化槽移設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 －



２００３

長崎県教育委員会

発刊にあたって

本書は，県立島原高等学校浄化槽移設工事に伴って実施した森岳城跡（もりたけじょうあと）の発掘調査報告書です。

森岳城は島原城ともいい，松倉重政が元和四(1618)年に築城した近世城郭で，南北に連なる連郭式平城で，外郭は周囲約４kmの長方形で塀をめぐらし，城門が７ヶ所あり，内郭は堀に囲まれた本丸，二ノ丸を設けていました。

調査対象となった場所は，森岳城の北側で三ノ丸に相当し，かつては歴代藩主の屋敷地として利用されていた所です。現在は県立島原高等学校の校舎敷地となっており，町割以外に往時の面影をとどめるものはほとんどありません。

調査では，掘立柱建物跡や柵列，溝状遺構，集石遺構，瓦溜まり，土坑といった遺構が確認され，三ノ丸周辺の様相が明らかになりました。また，松倉氏入封当時の遺構が今回初めて特定できたことは大きな収穫でした。

今回の発掘調査で，考古学的な成果が得られましたことは，今後島原の歴史を解明していく上で貴重な学術資料になることが考えられます。

最後に，本報告書が学術資料や地域の歴史教材として活用され，文化財への理解が一層深まることを祈念いたしますとともに，発掘調査にご協力いただきました関係者の皆様方にお礼申し上げます。

平成15年3月31日

長崎県教育委員会教育長

木　村　道　夫

例　　言

1　本書は長崎県島原市城内二丁目に所在する森岳城跡の発掘調査報告書である。

2　調査は県立島原高等学校の浄化槽移設工事に伴い，平成14年2月25日～3月14日に行われた内容確認調査の結果をもとに，本調査を平成14年7月8日～8月13日にかけて実施した。

3　調査は長崎県教育庁学芸文化課が主体となって実施した。

4　本書は本田秀樹・本多和典がそれぞれ分担執筆し，執筆者名は本文目次に記した。

5　遺構実測は基本的に調査担当者が行い，一部については石本アヤ子・木村光江・荒木恵子の協力を得た。

6　遺物実測は小林利恵子・松尾美代子・松尾直子が行った他，一部を㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した。トレースは佐藤いづみ・渡辺洋子が行った。

7　本書関係の写真撮影は，調査時の遺構については本田が行い，空中写真については㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した。遺物写真は本多の協力を得て，本田が撮影した。

8　本書で用いた方位はすべて磁北である。

9　本書で用いた遺構に関する表記は次のとおりである。
SA：柱穴列，SB：掘立柱建物跡，SD：溝跡，SE：井戸，SH：石組み遺構，SJ：集石，SK：土坑，SV：石列，SY：瓦溜まり，P：ピット

10　本書に関する遺物・写真・図面については，長崎県教育庁学芸文化課久原資料整理室で保管している。

11　本書の編集は本田による。

本　文　目　次

第１章　はじめに
第１節　調査に至る経過(本田) …… 1
第２節　調査組織(本田) …… 1

第２章　遺跡の立地と環境
第１節　地理的環境(本多) …… 3
第２節　歴史的環境(本多) …… 3

第３章　調査の概要
第１節　内容確認調査の概要と基本層序(本田) …… 6
第２節　本調査の概要と遺構(本多) …… 9
第３節　出土遺物(本田) …… 25
1　土器・陶磁器類 …… 25
2　瓦類 …… 27

第４章　まとめ(本田) …… 31

挿　図　目　次

森岳城跡位置図 …… とびら

第 1 図　森岳城跡調査区位置図①(1 / 2,500) …… 2
第 2 図　森岳城周辺の主要遺跡(1 / 50,000) …… 5
第 3 図　森岳城跡調査区位置図②(1 / 1,500) …… 6
第 4 図　内容確認調査試掘坑配置図 …… 7
第 5 図　G 4平面図・土層図(1 / 40) …… 8
第 6 図　V 2平面図・土層図(1 / 40) …… 8
第 7 図　溝跡内西側石列(SD05)(1 / 30) …… 9
第 8 図　溝跡内西側石列(SD05)，土坑(SK14)(1 / 30) …… 10
第 9 図　調査区全体遺構配置図(1 / 100) …… 11・12
第10図　石組み遺構(SH02)(1 / 20) …… 13
第11図　石組み遺構(SH03)(1 / 20) …… 14
第12図　土坑(SK10)(1 / 20) …… 15
第13図　土坑(SK11・12)(1 / 60) …… 16
第14図　土坑(SK13)(1 / 60) …… 16
第15図　集石(SJ01)(1 / 20) …… 17
第16図　集石(SJ02)(1 / 20) …… 17
第17図　集石(SJ03)(1 / 20) …… 18
第18図　集石(SJ04)(1 / 20) …… 18
第19図　瓦溜まり(SY01・02)(1 / 20) …… 19
第20図　掘立柱建物跡(SB08)，柱穴列(SA04)(1 / 120) …… 20
第21図　柱穴列(SA05)(1 / 120) …… 21
第22図　森岳城関連資料① …… 23
第23図　森岳城関連資料② …… 24
第24図　内容確認調査(V 2)出土遺物(1 / 3) …… 25
第25図　本調査出土遺物(1 / 3) …… 26
第26図　瓦の部分名称 …… 27
第27図　軒丸瓦(1 / 4) …… 28
第28図　軒平瓦，目板瓦，鬼瓦ほか(1 / 4) …… 29

表　目　次

第１表　遺跡地名表 …… 4
第２表　軒丸瓦・軒平瓦観察表 …… 30
第３表　島原藩関連年表 …… 32

図　版　目　次

図版１ …… 35
1　調査区遠景①(南から)　2　調査区全景①
3　調査区遠景②(南から)　4　調査区全景②(南から)
5　SB08①(南から)　6　SB08②(南から)
図版２ …… 36
1　N２礎石(北から)　2　G４石組み溝(東から)
3　V１(北東から)　4　V２(南東から)
5　V２(北東から)　6　V２遺物出土状況①(北東から)
7　V２遺物出土状況②(北東から)　8　V２遺物出土状況③(北東から)
図版３ …… 37
1　SJ02(北から)　2　SK10(東から)
3　SY01(東から)　4　SY02(東から)
5　SH02，SJ04(北東から)　6　SH02(南から)
7　SH02，SJ04(東から)　8　SH02(東から)
図版４ …… 38
1　SD05(北東から)　2　SD05(南から)
3　SD05(南東から)　4　SD05，SK14(南東から)
5　SH03(南東から)　6　SH03(東から)
7　SB08，SA04(南から)　8　SB08，SA04(南東から)

図版５　森岳城跡出土陶磁器① …… 39

図版６　森岳城跡出土陶磁器② …… 40

図版７　森岳城跡出土瓦 …… 41

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

森岳城は島原城ともいい，雲仙岳の東側裾野にある島原市内の森岳と呼ばれる丘の上に築かれた近世城郭である。大和五条から入封した松倉重政が，元和四年(1618)に築城したと伝える。

調査対象地は森岳城の三ノ丸にあたり，歴代藩主の屋敷地として利用されていた場所である。平成11年と平成12年には，県立島原高等学校の体育館と同窓会会館建設に伴い発掘調査が実施された。調査では，三ノ丸東辺の堀石垣と橋脚，穴蔵と思われる石組み遺構，集石土坑が確認され，17世紀後半以降における屋敷内部の一端が明らかになった。また，16世紀後半代の掘立柱建物跡７棟も検出され，築城以前の様子も初めて知られるようになった。(第３図)

今回の調査は県立島原高等学校の浄化槽移設に伴うものである。契機は，平成14年２月に教育庁財務課から，学校中庭にある浄化槽の移設と渡り廊下・プレハブ校舎建設について照会を受けたことに始まる。結局，対象地の発掘調査結果を待ったうえで，協議することとなった。

確認調査は同年２月下旬から，約３週間の日程で行われた。調査では，中庭は配管埋設時の攪乱が地中深く及び，グラウンドは西側半分が地山まで削平を受けていたことが判明した。三ノ丸の遺構は，グラウンドの東半分と弓道場横の空き地で確認された。

以上の結果をもとに，同年４月上旬，再度協議がもたれた。その席で，プレハブ校舎建設予定地であるグラウンドは地下30～50cmに遺構が存在するため，基礎杭の深度を浅くするよう求めた。ただし，浄化槽移設については弓道場横以外に候補地はないことから，本調査が生じるようになった。

後になって，浄化槽移設に伴い，排水管等の埋設も付帯工事としてあがった。工事深度は2.3m前後と深く，遺構に抵触する可能性があり，本調査実施時に立会調査を実施する旨を伝えた。

第２節　調査組織

この調査は長崎県教育委員会が調査主体となり，県教育庁学芸文化課が調査を実施した。なお，各調査担当者は次のとおりである。

①平成13年度　内容確認調査

・調査担当　長崎県教育庁学芸文化課埋蔵文化財班　文化財保護主事　本田秀樹(14日間)
　　同　文化財調査員　竹中哲朗(５日間)
　　同　文化財調査員　上原　恵(９日間)

・調査期間　平成14年２月25日～３月14日(14日間)

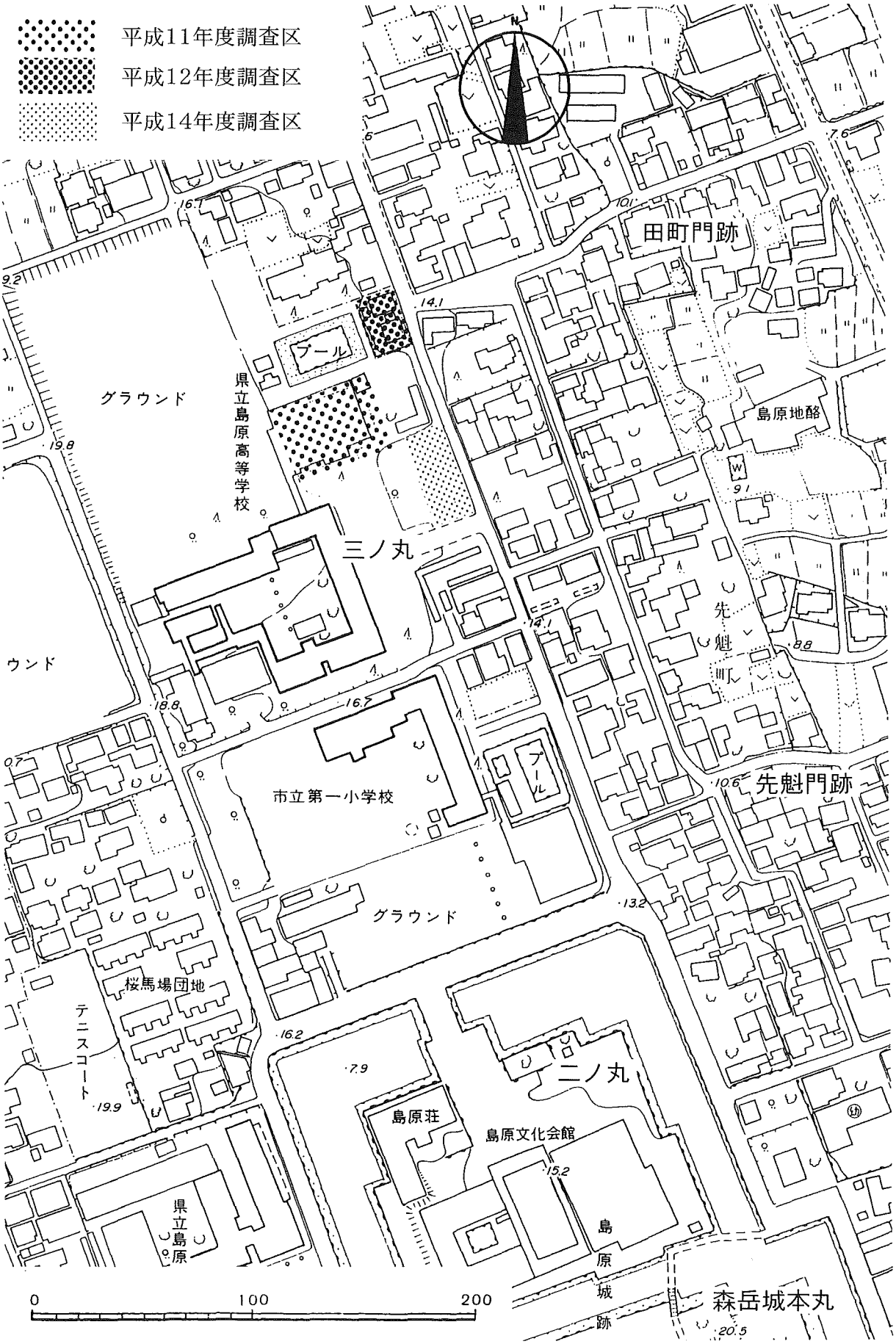
・調査面積　37.5㎡

②平成14年度　本発掘調査

・調査担当　長崎県教育庁学芸文化課埋蔵文化財班　文化財保護主事　本田秀樹(27日間)
　　同　文化財調査員　本多和典(27日間)

・調査期間　平成14年７月８日～８月13日(27日間)

・調査面積　318.7㎡



第１図　森岳城跡調査区位置図①(S＝1／2,500)

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

森岳城の所在する島原半島は，周囲を有明海と橘湾に囲まれた東西約17km，南北31kmの半島で，北西部の愛野地峡で諫早方面と繋がる。地質的には，南島原火山地域と雲仙火山地域の南北２つの地域に大別できる。有馬川以南の南島原火山地域は，玄武岩でできた台状火山からなり，雲仙火山地域よりも古い火山地域とされる。雲仙火山地域は主峰の普賢岳を中心に大小22の山体からなり，小浜町と布津町とを結ぶ半島を横断するラインでは断層地形の形成を見ることができる。また，雲仙火山地域の北部・東部においては新旧の扇状地群が認められる。

森岳城は，島原半島東部の島原市に所在し，眉山北西に形成された扇状地上の緩やかな斜面を利用して築城されている。

森岳城築城後の雲仙普賢岳の活動の記録としては，1657年の古焼溶岩，1791年の新焼溶岩という溶岩噴出を伴う二度の噴火が知られ，1792年には眉山南峰天狗の山体，東側三分の一が崩壊した。これにより，島原地方・熊本地方合わせて15,000人の死者を出す大惨事となり，海岸線が800m前進したという。

第２節　歴史的環境（第２図，第１表，図版１）

森岳城（１）周辺の遺跡をみてみると，森岳城北部の三会原周辺に多くの良好な遺跡が確認されている。礫石原遺跡（２），畑中遺跡（３），稗田原遺跡（４）といった晩期前半期の遺跡が豊富である。

礫石原遺跡（２）は，カメ棺墓２基と集石墓10基からなる墳墓群や石組遺構の検出がある。

畑中遺跡（３）は，縄文時代前期・晩期，中世を主体とする遺跡で，縄文時代晩期のカメ棺墓４基，中世期の溝で囲まれた建物跡，道路状遺構，製鉄遺構などが検出されている。

稗田原遺跡（４）においては，旧石器時代から中世にかけての遺物が検出されており，古墳時代初頭の住居跡が確認されている。

弥生時代の遺跡として，同じく三会原の沖積平野を生活基盤としていたであろう景華園遺跡（５）があげられる。景華園遺跡（５）は，海岸にほど近い台地の先端部に立地する墳墓遺跡で，甕棺墓の出土数は不明確ながらこれまでに100基を超えたといわれる。

元禄12年(1699)の島原藩の藩日記である『深溝世紀』によれば，藩主の別荘を建設する際，大石が４，５個あり，その大石の下から銅剣２本が出土したとの記述が見られる。昭和の初頭頃には銅矛２本の出土がある。また，昭和34年には，銅剣２本と管玉多数が３基の甕棺墓内より発見されている。島原半島北半において金属器を副葬する弥生時代の墳墓はほかに例がなく，地域の中核をなす集団の墳墓遺跡であるといえる。

中世においては，浜の城（６），丸尾城（７），寺中城（８）といった天正12年(1584)の龍造寺氏と有馬・島津両氏の決戦である沖田畷の戦にゆかりのある城郭が知られる。

浜の城（６）はいわゆる「島原大変，肥後迷惑」とよばれる寛政４年(1792)の眉山崩壊によって埋没し，その所在地は不明である。島原純豊が安富純治らと龍造寺方について立てこもったが，有馬・島津両氏の連合軍によって攻められ落城している。

丸尾城(7)は，沖田綴の戦の際猿亙越中守が龍造寺方の鍋島直茂の攻撃を受け，激戦が展開されたといわれる。現在は，島原藩主松平家の菩提寺として本光寺が置かれている。

寺中城(8)は島原氏の家臣和泉左京が城主で，沖田綴の戦の際には龍造寺隆信が討死する前の最後の一夜を過ごしたとされる。

こうした歴史的流れを踏まえて，森岳城は松倉重政の手によって元和４年(1618)に築城がはじまり，７年の歳月をかけて完成を迎えている。

参考文献

長崎県編 1984 「雲仙火山　地形・地質と火山現象」『雲仙の自然と歴史』

倉沢　一 1992 「第４章火山　３大山火山帯(4)雲仙火山」『日本の地質９　九州地方』共立出版株式会社

太田一也・小林哲夫・露木利貞 1992 「第６章応用地質　３災害地質　(4)噴火災害」『日本の地質９　九州地方』共立出版株式会社

外山幹夫ほか 1980 『日本城郭体系　第 17 巻』新人物往来社

浦田和彦・町田利幸 1988 『礫石原遺跡』島原市教育委員会

副島和明・町田利幸 1991 『礫石原遺跡』長崎県教育委員会

安楽勉・村川逸朗 1994 『畑中遺跡』島原市教育委員会

長崎県教育委員会編 1997 『原始・古代の長崎県　資料編Ⅱ』長崎県教育委員会

村川逸朗編 1997 『稗田原遺跡Ⅰ』長崎県教育委員会

川口洋平編 1999 『稗田原遺跡Ⅴ』長崎県教育委員会

番号	遺跡名称	所在地	種別	立地	時代	備考
1	森岳城跡	島原市城内１丁目，２丁目	城跡	平野	近世	
2	礫石原遺跡	島原市礫石原町	集落・墳墓	丘陵	縄文	
3	畑中遺跡	島原市中原・亀の甲，御手水町	遺物包含地	平地	縄文～中世	
4	稗田原遺跡	島原市稗田町	遺物包含地	平地	縄文・弥生	
5	景華園遺跡	島原市中野町高城元	墳墓	海岸段丘	弥生	
6	浜の城跡	島原市新町１丁目	城跡	平地	中世	
7	丸尾城跡	島原市本光寺町本光寺内	城跡	平地	中世	
8	寺中城跡	島原市中野町城の鼻	城跡	丘陵	中世	

第１表　遺跡地名表

第２図　森岳城周辺の主要遺跡(1 / 50,000)

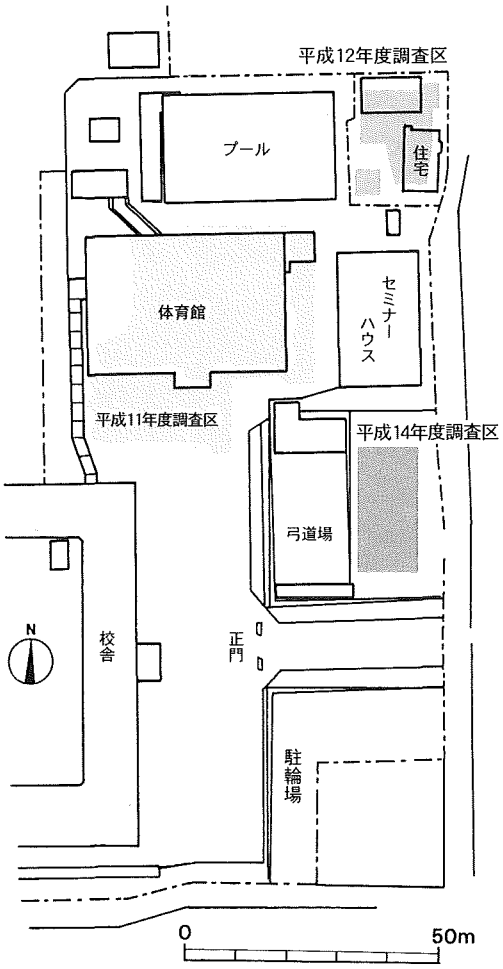
第３章　調査の概要

第１節　内容確認調査の概要と基本層序（第３～６図，図版２）

調査は県立島原高等学校の浄化槽移設地にＶ１・Ｖ２，渡り廊下建設地にＮ１・Ｎ２・Ｗ１，仮設校舎建設地にＧ１～Ｇ４の試掘坑を設けて実施した。（第４図）

実際の調査では，学校建物に付随した諸施設の地下埋設により，攪乱が地中深くまで及び，かなりの量の埋土で覆われていることが判明した。層序は地点によって大きく異なるが，基本的には１層が表土層，２層が茶褐色土，３層が黒色土となる。これまでの調査事例によると，森岳城の遺構は３層に掘り込まれており，今回も同様のことがうかがえる。なお，調査において確認された土層は以下のとおりである。

第１層：表土(埋土)
　第１ａ層：茶褐色砂質土層(パサパサの埋土)
　第１ｂ層：明褐色粘土層
第２層：茶褐色土層
　第２ａ層：暗茶褐色土層
　　第２ａ' 層：混礫暗茶褐色土層
　第２ｂ層：黒茶褐色土層(黒褐色土のブロック混入)
　第２ｃ層：淡黄褐色土層
　　第２ｃ' 層：混礫淡黄褐色土層
　　第２ｃ" 層：淡茶褐色砂層(砂質化した第２ｃ層)
　第２ｄ層：淡灰色砂層(整地層)
　第２ｅ層：赤茶褐色粘質土層(整地層)
　第２ｆ層：混貝茶褐色土層(1cm大の貝殻を含む)
第３層：黒色土層
　第３ａ層：黒褐色土層
　第３ｂ層：黒茶褐色土層
第４層：淡黄褐色砂質土層
第５層：淡褐色砂礫層(地山)



第３図　森岳城跡調査区位置図②（1／1,500）

各試掘坑の概要は次のとおりであった。

Ｎ１・Ｎ２は絵図によると藩主屋敷が建っていた場所で，建物遺構の存在が最も期待される場所である。ただし，廃城後は幾度か施設が建て替わり，学校敷地となってからも校舎の改築や付帯施設等で工事の手は常に入っていた。

調査のため掘り下げると，かなりの回数にわたって地中が掘り返されており，地下1.5mまで撹乱が及んでいることが判明した。撹乱はＮ１では地山にまで達していたが，Ｎ２では撹乱の下に30cmほど堆積した第３層と，そこに掘り込まれたピットを確認することができた。

ピットは平面が楕円形をなし，長径約70cm，短径約50cmを測る。ピットの中央には20cm角の方形の石が据えられ，周囲を別の石で囲むようにしていた。石の上面が平坦に整っていることから，建物の

礎石の一部と考えられる。撹乱が第３層まで及ばなかった部分については，他にも遺構が残存している可能性は高い。

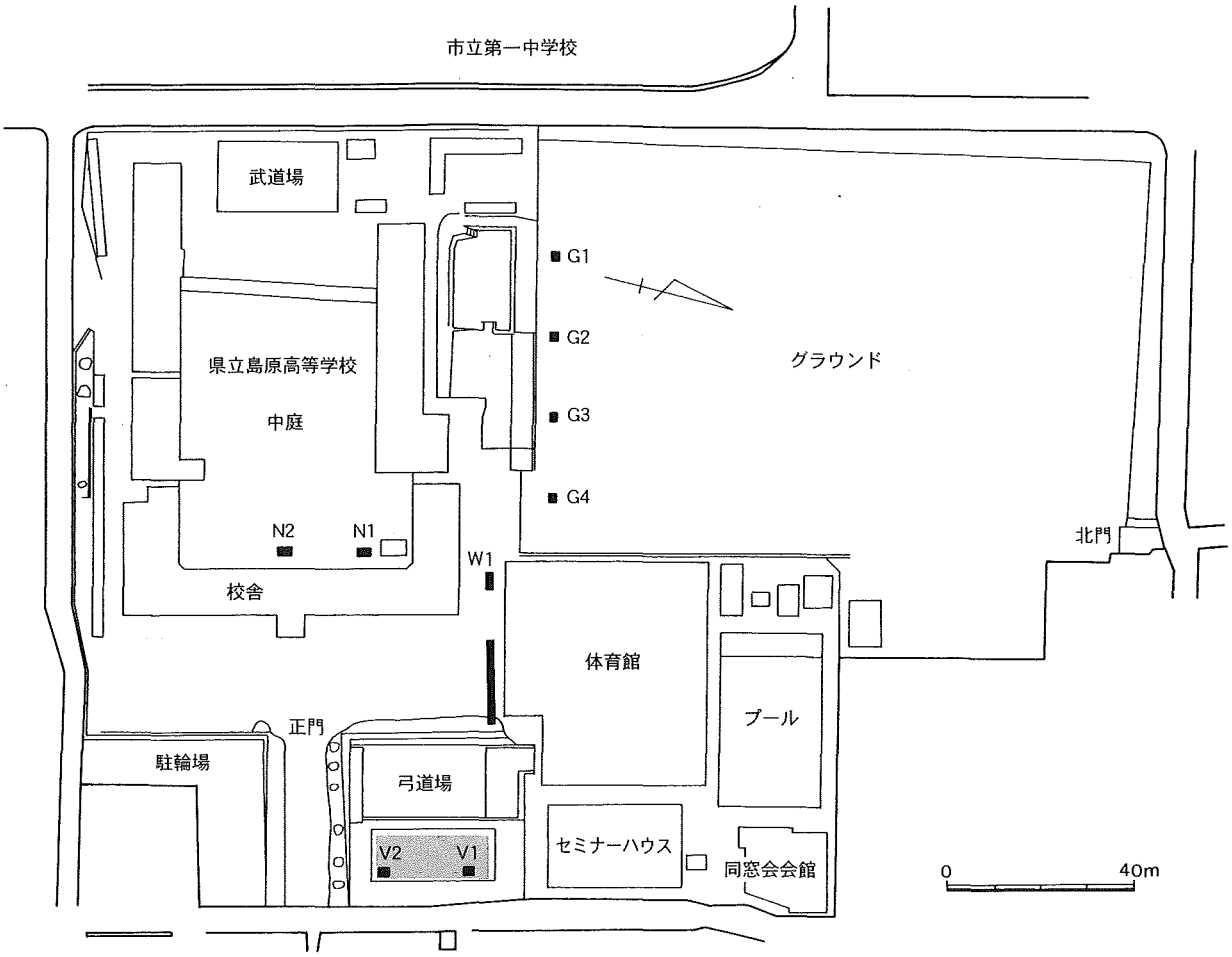
Ｇ１～Ｇ４は現在島原高等学校のグラウンドであるが，かつては屋敷地の庭園部分であったと想定される。西側に設けたＧ１・Ｇ２では表土のすぐ下に地山があらわれ，遺構は何ら確認できなかった。これに対し，Ｇ３・Ｇ４はある程度土層の堆積がみられ，遺構も伴うことが判明した。東にいくにつれて徐々に地山までの深さも増すようである。廃城後に大規模な土地の改変が行われたという記録はなく，築城に際して西側の削平は行われたのであろう。

Ｇ３は北壁の土層に東西に伸びる石列をみることができた。所々石は抜けているものの，石面は南に向いている。石列の天端は乱れており，この部分まで撹乱が及んでいるのであろう。石列の南側には整地層と考えられる淡灰色砂層が広がっていた。遺構の性格は不明である。

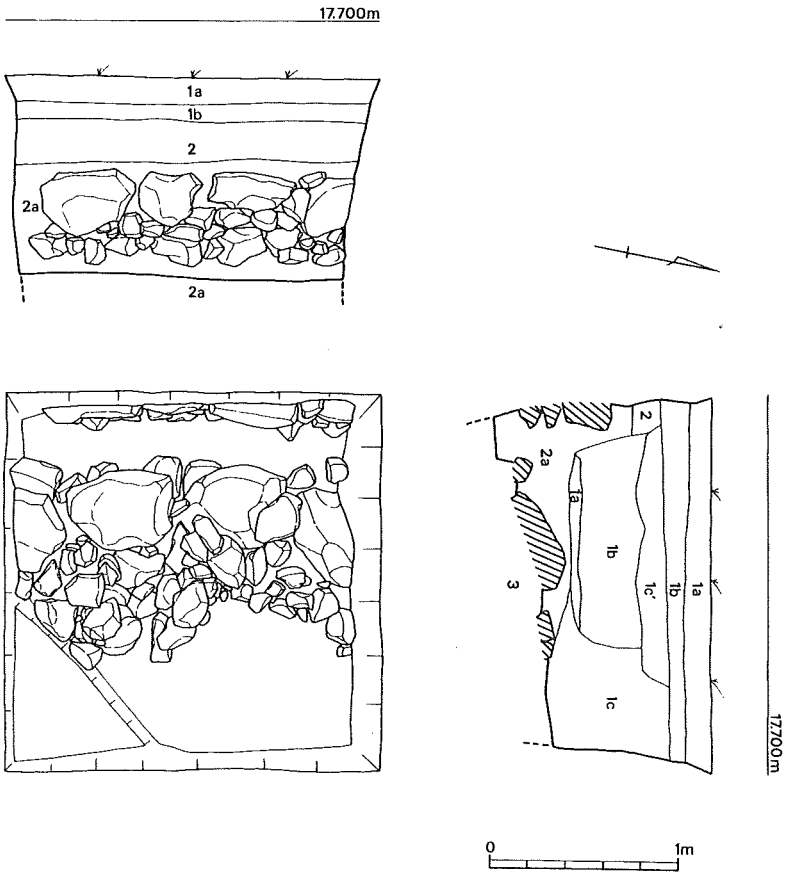
Ｇ４では南北に走る石組み溝を検出した(第５図)。溝は 30 ～ 50cm 大の石材を横に並べて構築し，塊石の下部には人頭大の礫を敷いて固定させているのがわかる。溝幅は約 20cm を測る。溝の東側石組は後世の撹乱で削平されており，基底部の石のみが残存していた。

Ｗ１は本館と体育館をつなぐ渡り廊下建設部分に設けた試掘坑である。汚水管等の埋設工事が頻繁に行われていたようで，地山直上付近まで撹乱され，埋土が大半を占める状態であった。遺構は全くみれらなかった。

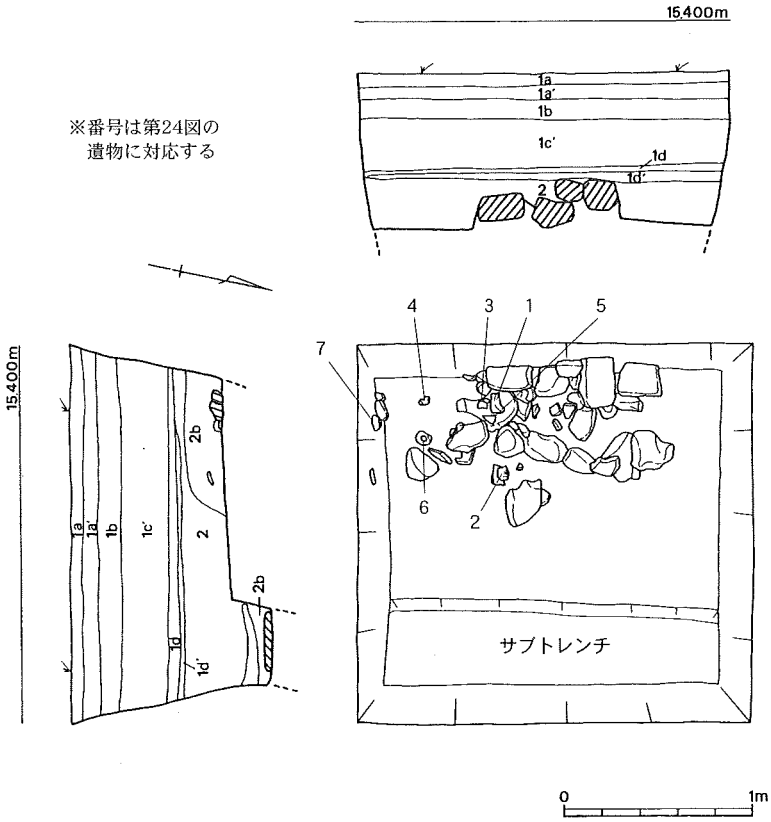
Ｖ１・Ｖ２は浄化槽移設予定地にあたる。ここは三ノ丸の外部となり，絵図面では堀の内部か三ノ



第４図　内容確認調査試掘坑配置図



第５図　Ｇ４平面図・土層図(１／40)



第６図　Ｖ２平面図・土層図(１／40)

丸外周の道路にあたる。現在，弓道場やバレーボールコートとして利用されており，建物等の建設はこれまでない。掘り下げると，地表下50cmまではコート整備の際に整地した形跡が窺え，遺構はその下で検出された。

Ｖ１は北西側で30～40cm大の石を不規則に組み合わせた遺構がみつかった。石の下部に完形の丸瓦を置くなど，遺構の性格は不明な点が多い。石のなかった東壁面に沿ってさらに掘り下げると，40cm下で地山面に達した。地山は北から南へ緩く傾斜をするようだ。

Ｖ２は西側壁面付近で，やはり石を不規則に配した遺構がみつかった(第６図)。くらわんか茶碗や仏飯器，蛸唐草の小瓶，土鍋が遺構に伴って出土している。概ね18世紀後半代頃のものであろう。Ｖ１と同じく東側を掘り下げると，落ち込みの上に平石を重ねた不明遺構がみつかり，複数の遺構面が存在することを確認した。

出土遺物は瓦類を中心に，近世陶磁器や鉄製品などがある。ほとんどは攪乱を受けた埋土中からで遺構に伴うのはＶ２しかない。

結果的に，Ｎ２・Ｇ３・Ｇ４・Ｖ１・Ｖ２では三ノ丸に伴う遺構と包含層を検出した。これに基づき協議を行い，最終的に工事による地下への影響を回避できない浄化槽移設地の318.7㎡について，本調査を実施することとなった。

第２節　本調査の概要と遺構

本調査は浄化槽移設地の 318.7㎡を対象に実施した。調査区は森岳城三ノ丸に隣接する東堀端にあたる。三ノ丸は歴代城主が居住した場所で，絵図面を見ると屋敷地の内外は土塀や堀等で隔絶されている。調査地点は屋敷地外になり，当初は堀底か外周の取り付け道路の可能性を考えていた。しかしながら，事前調査で遺構の存在が確認されたことで，絵図面と調査成果との検証作業が不可欠となった。遺構の検討結果については，本節の末尾に詳述する。

発掘に先立ち，調査区全体を分割してグリッド設定を行った。まず調査区を東西に二分し，それぞれをＥ・Ｗのアルファベットで表した。南北方向は 5m 間隔で区分し，南から順に２～７の番号を付した。各グリッドはアルファベットと番号の組み合わせで呼称するようにした。（第９図）

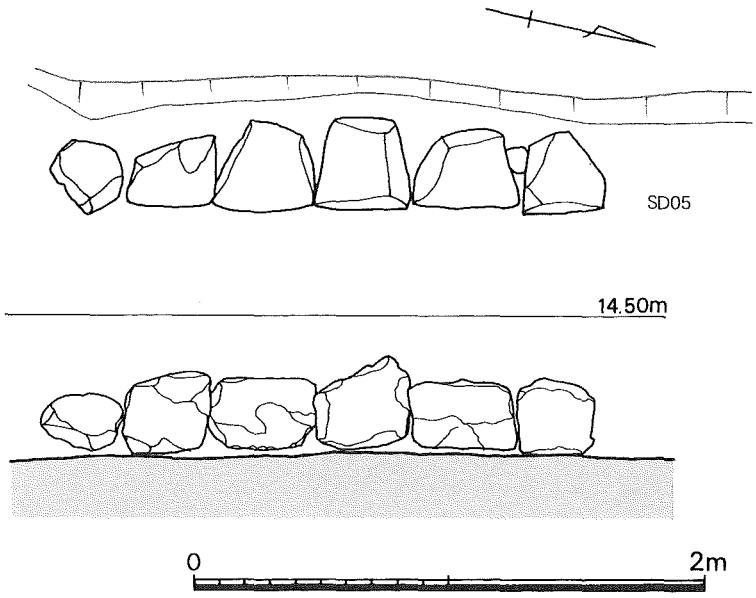
調査は表土の 50cmを重機で除去した後，西側部分から順に掘り進めていった。その結果，溝跡１基，石組み遺構２基，土坑５基，集石４基，瓦溜まり２基，掘立柱建物跡１棟，柱穴列２基，井戸跡１基を検出した。以下，遺構ごとに説明を加えていくことにする。なお，各遺構番号は平成 11 年度・平成 12 年度調査からの通し番号を用いた。

溝跡（SD05）（第７図・第８図，図版４）

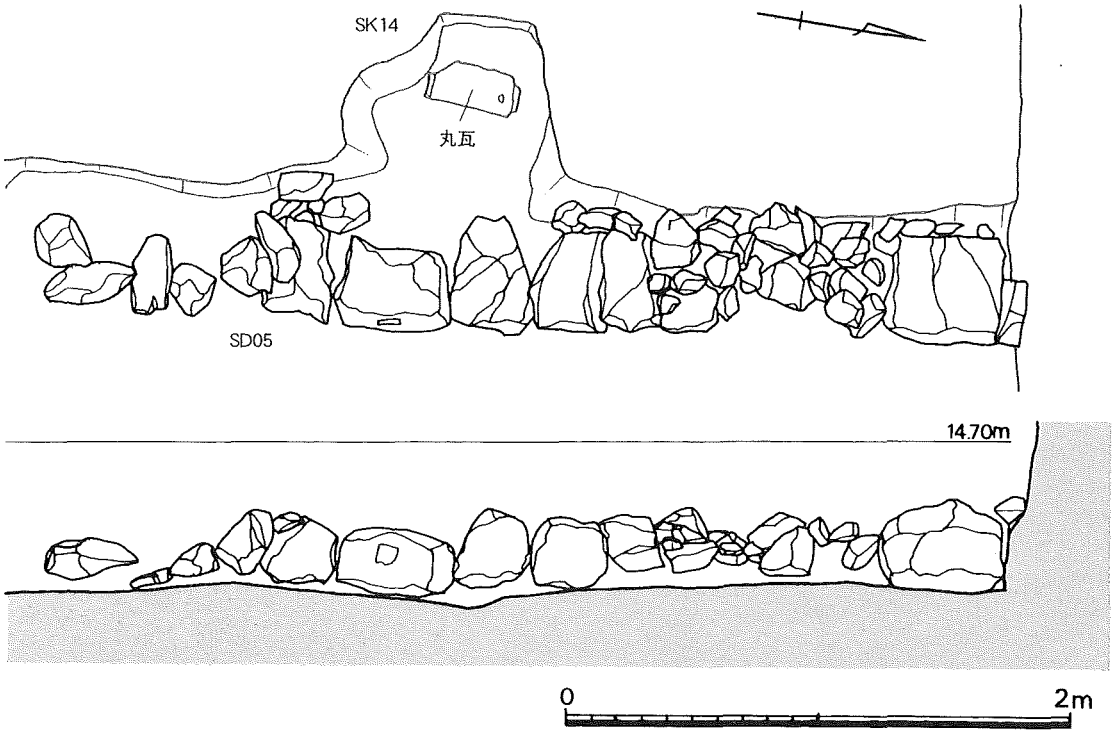
調査区東側のＥ区において南北におおよそ 26m を検出した。幅は１ｍ～1.4m，深さは約 30cmを測る。調査区周辺は北から南へと各層は傾斜をもって堆積しており，高い部分を削平して地ならしすることによって平坦面が造成されている。そのため調査区においても傾斜の高かった北側部分については３層と４・５層（地山風化層・地山層）が削平され，その後整地面や溝が造営されている。溝についていうと，Ｅ２区からＥ６区の中ほどにかけては３層から地山直上かあるいは地山の一部にまで掘り込んでいるが，それより北側になると南側とレベルを合わせて３・４層を取り払い，平坦に造成された地山に直接掘り込んでいる。

溝の掘り込み内には，茶褐色土が覆土として入り，それと一緒に 20～50cm程度の割石が投げ入れられたような状態で検出された。溝全体を埋め尽くすほどの量が検出されたことから，石列が一段であったとするならば石材の数が多すぎる。隣接している石組み遺構の高さも約 50cmはあることからすれば，少なくとも２段積みの石列であった可能性が高い。

溝内の石列については，検出状況からある程度整えられた割石材を用い，石面を溝の内側に向かい合わせにして据えられていたと想定された。よって明らかに当時の様相をとどめていない石列石材を取り除くと，本来の据えられた位置を保つ石材はあまり多くは残存しておらず，しかも



第７図　溝跡内西側石列（SD05）



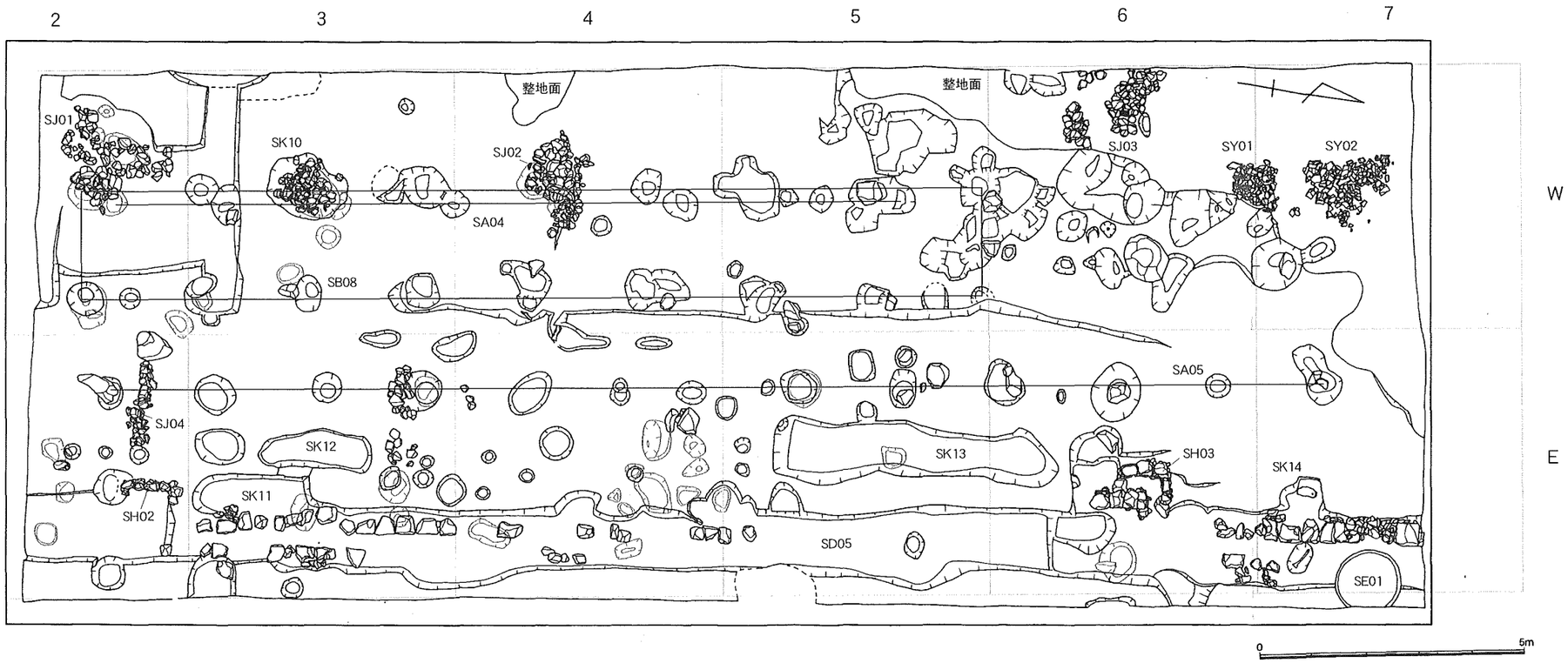
第８図　溝跡内西側石列(SD05)，土坑(SK14)（１/30）

一段目のみである。ここでは比較的残りの良かった石列西側列のＥ３区部分とＥ７区部分について述べる。

まずＥ３区部分については，30～40cmの石材６個を石面を東側を向かせて揃えて配置している。控えの長短は特に統一しておらず，北端の２個の石材には，拳大の小礫をかませて座りをよくしている。裏込めのグリ石は検出されなかった。この石列の南側には石材がさらに８個並び，グリ石らしき小礫も数個みられるが，配石の軸がやや西側にずれていること，石面が揃っていないことを考えると積極的に石列の延長とは認められない。あるいは溝の廃棄時に乱れたものであろうか。溝幅については，対面する東側列の石材との間隔から約25cmとみてよい。

Ｅ７区部分の西側列については，後世の井戸造営のために一部石材が抜き取られているが，30～50cm大の石材６個を石面を揃えて配している。石材は控えの長いものを多用しているが，石面幅より控えの短いものもみられる。また，20～30cm大のやや小振りの石材数個も石面のラインに揃っているものがあり，石列を構成していたかも知れない。石材の一つには，石面にほぞ穴が穿ってあり，石列の石材の中には他の石造物からの転用・再利用のものがあったことをうかがわせる。井戸造営による破壊部分を中心にグリ石らしき石材もみられる。わずかに残る東側列の石材から東西両石列の間隔は約23cmと判断され，Ｅ３区部分と大差ない。

現段階でこの溝跡が常時水をたたえていたのかは定かでなく，導水・排水の区別もつかない。また，建物等を取り囲むものなのか，城内を南北に走るものなのかも判断がつかない。床面に瓦敷きや敷石などの構造は確認されなかった。ただし，溝床面のレベルと周辺地形から判断して，北から南への流水方向が考えられる。



第９図　調査区全体遺構配置図（１/100）

石組み遺構(SH02)(第10図，図版3)

E 2区において溝に接して検出した。20cm大の石材を用い，3～4段積み上げている。北側でL字状に折れ，本来は溝までのびて溝内の石列に接続していたものと思われる。残存状況が悪く，全体の様相は不明であるが，SH03の奥壁に対応する部分ではないかと想定する。

石組み遺構(SH03)(第11図，図版4)

E 6区においての検出で，溝跡(SD05)が東側に隣接して造築されている。奥壁は30～40cm大の石材を3段に積み，10cm前後の石材を介石として隙間に入れ，座りをよくしている。北側で直角に曲がり，地山中の自然石を基底石の一つとして，奥壁と比すればやや小振りの石材をやはり3段に積み上げている。

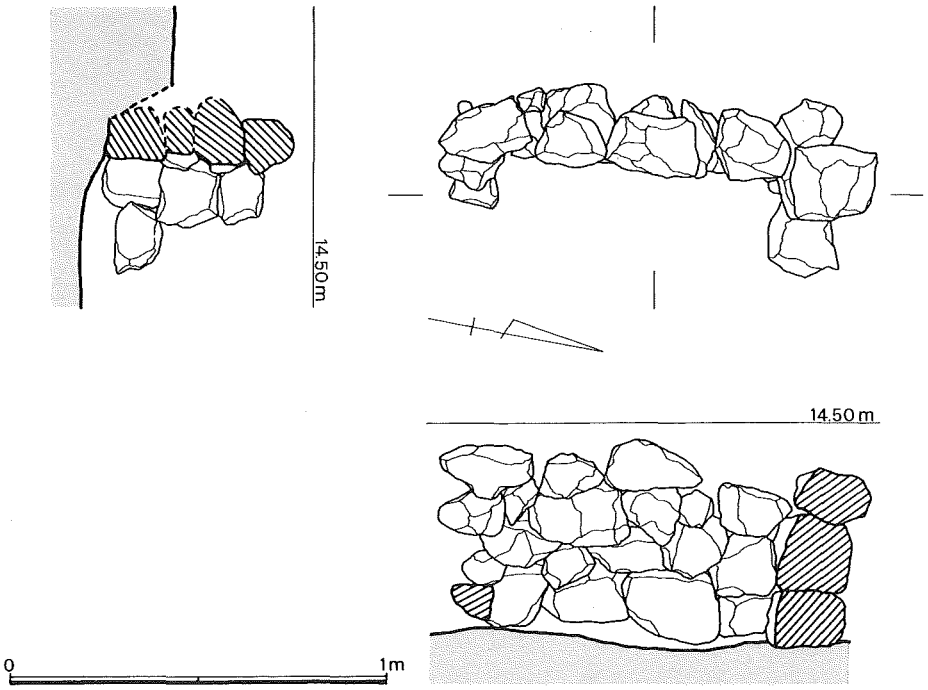
正面壁は，40～50cm大の石材を1～2段置き，やはり10cm前後の小石材をはさんで安定をよくしている。北側で東に折れ溝の方へのびるかと思われるが，残存部分はわずかである。ここも対面と同様，小振りの石材を用いている。ただ正面壁については石材の石面が溝の方を向いて据えられており，疑問が残る。石組み遺構付近で溝幅が拡幅していたことも考えられる。

土坑(SK10)(第12図)

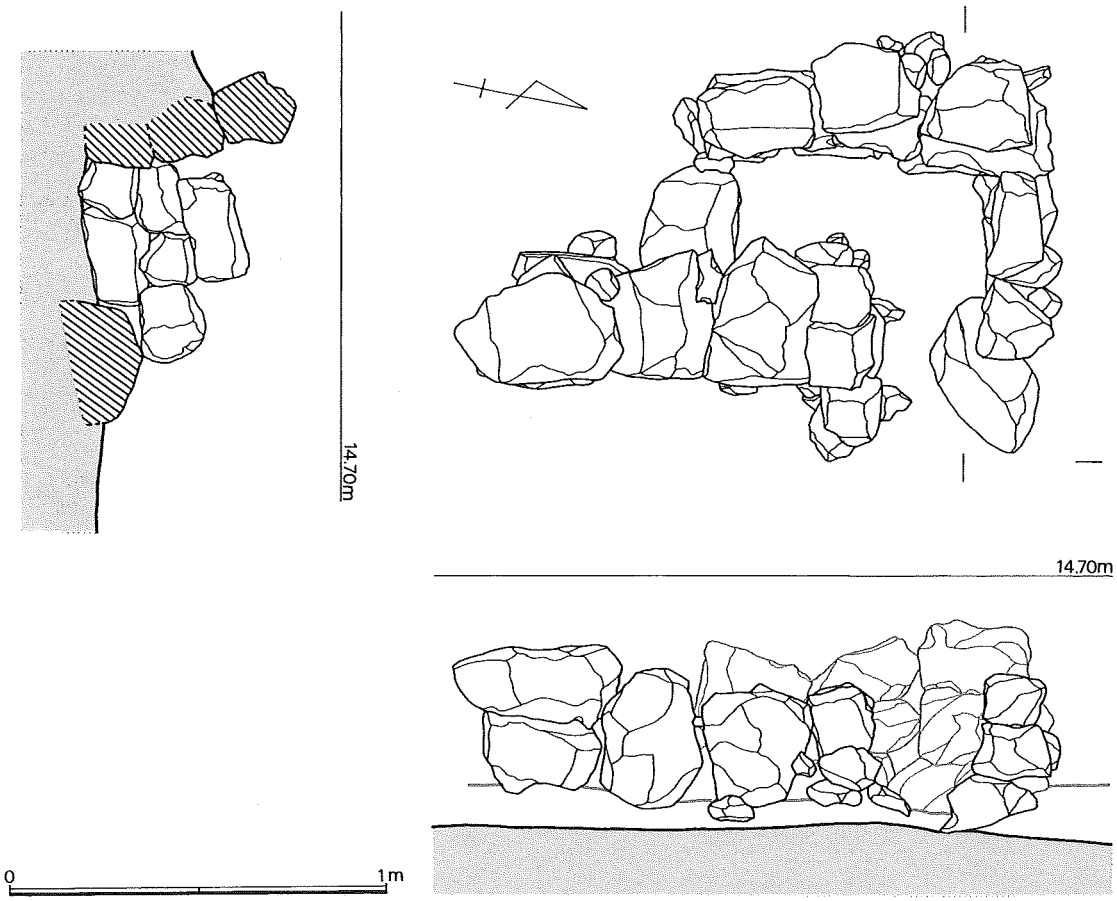
W 3区において検出されており，SB08の西側を構成する柱穴の上に掘り込まれている。掘立柱建物の廃棄後の造営で，平面不整円形を呈し，長径1.5m，短径1.1m，深さ13cmを測る。覆土はしまりのない暗茶褐色土で，20cm以下の礫が投げ入れられ，瓦片も数点含んでいる。

土坑(SK11)(第13図)

E 3区において検出された。主軸を南北方向にとり，長軸2.2m，短軸0.7m，深さ約30cmを測る。



第10図　石組み遺構(SH02)(1/20)



第 11 図　石組み遺構(SH03)（1 / 20）

溝跡(SD05)の西側石列に隣接している。覆土は混礫の淡茶褐色土で，床面の傾斜はやや北から南に下る。

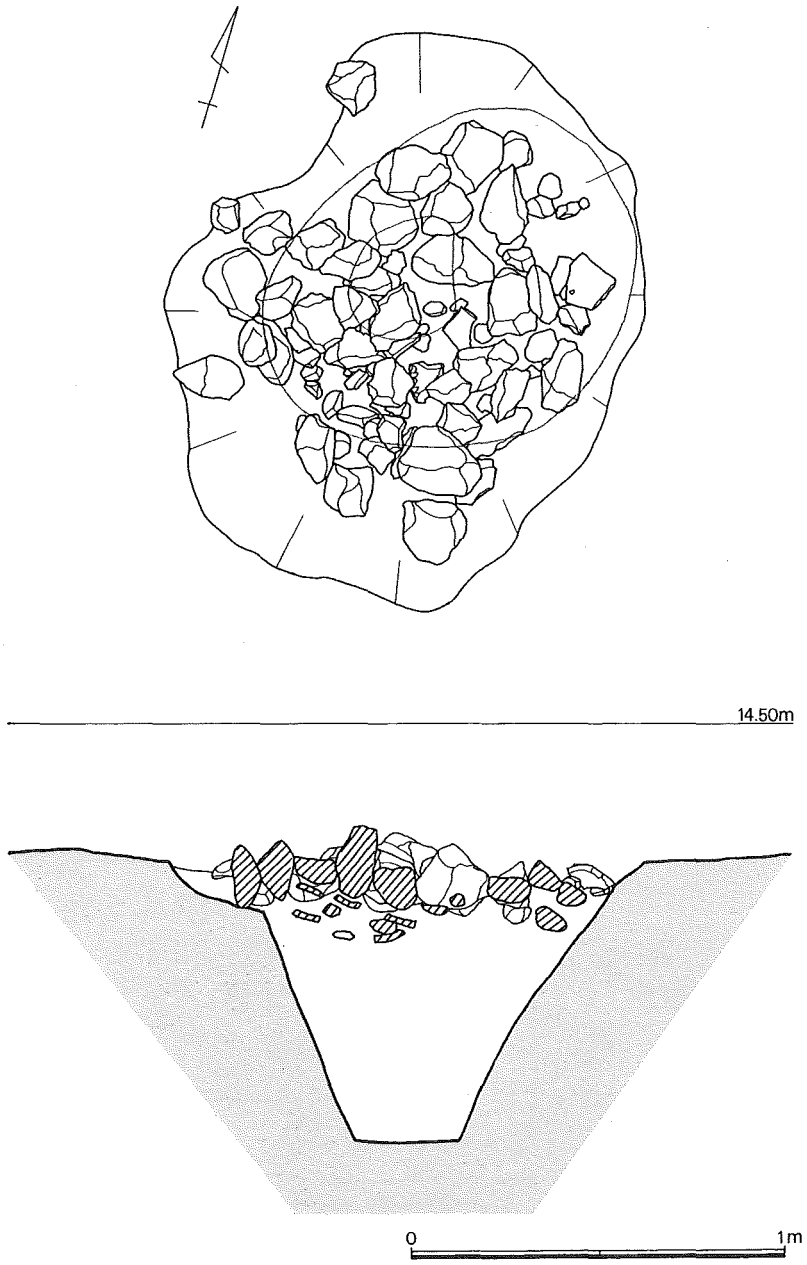
土坑(SK 12)(第 13 図)

E 3 区において SK11 の北西に隣接して確認された。主軸は SK11 同様，南北方向にとり，長軸 2.2 m，短軸 0.7m 前後，深さ約 12cmを測る。覆土も SK 11 同様，混礫の淡茶褐色土である。

SK11 と SK12 とはその間が幅 60cmの掘り込みによって連結されており，２つの土坑がセットになって一つの機能を果たした可能性がある。SD05 と接し，SH02 ともほど近いことを考えれば，導水あるいは排水関係の遺構であることも想定されよう。

土坑(SK 13)(第 14 図)

E 5 区から E 6 区にかけて検出した。SK11・SK12 同様，南北に細長く溝状にのびる土坑である。長軸 5.4m，短軸 1.0m 前後，深さ約 25cmを測る。覆土には礫を多く含む淡茶褐色土が入る。SD05 と平行して走り，その間隔は約 50cmである。SH03 が北側にあり，SD05 とも近接していることを考えれば，やはり導水あるいは排水関係の施設の一部になるものであろうか。



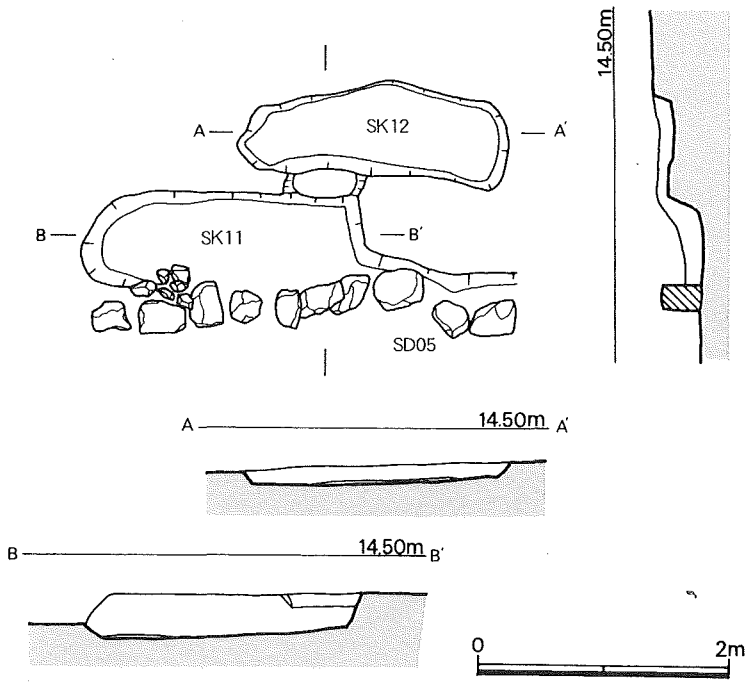
第12図　土坑(SK10)（1/20）

土坑(SK14)(第8図，図版4)

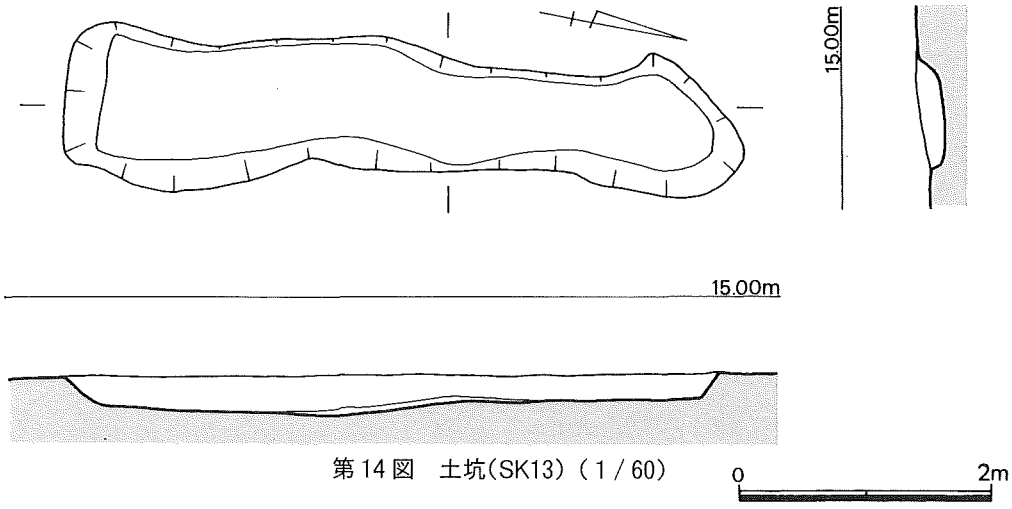
E 7区の検出で，地山(5層)に直接掘り込んでいる。SD05が東側に造営されたことにより，土坑の一部は切り取られているが，本来は径80cmほどの不整円形を呈していたものと思われる。深さは約27cmである。床面からは丸瓦1枚がほぼ完形で出土している。

集石(SJ01)(第15図)

調査区南西隅のW 2区において確認された。南北2.0m，東西2.0mほどのまとまりをもつ。30cm以下の礫がまとまって検出されたが，他の集石に比べてさほど密集はしておらず，掘り込みもない。



第13図　土坑(SK11・12)（1/60）



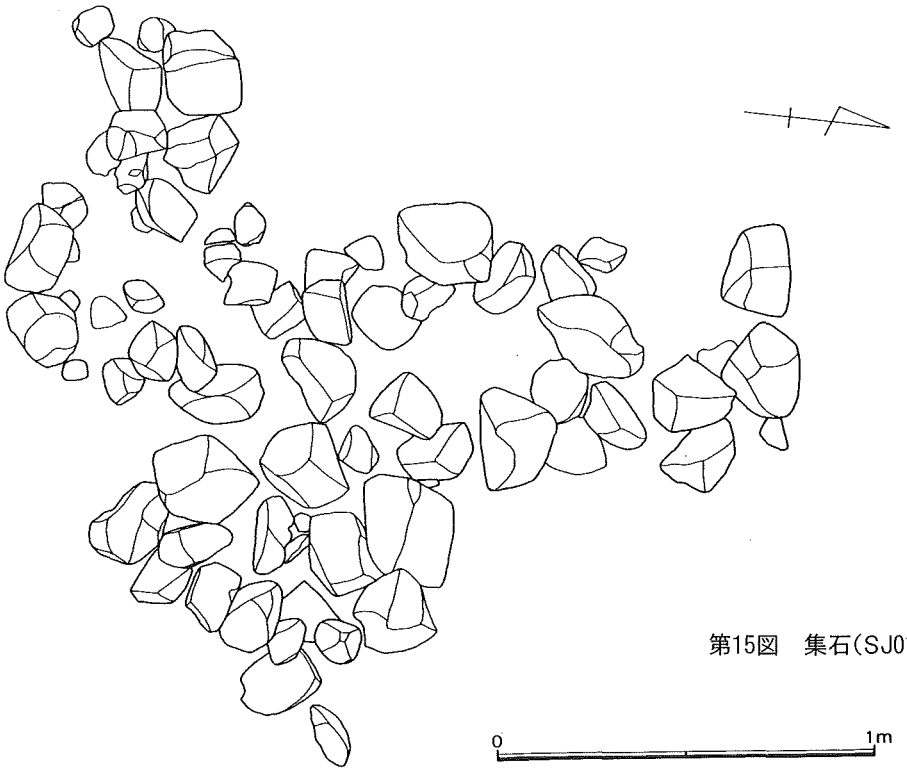
第14図　土坑(SK13)（1/60）

集石(SJ02)(第16図，図版3)

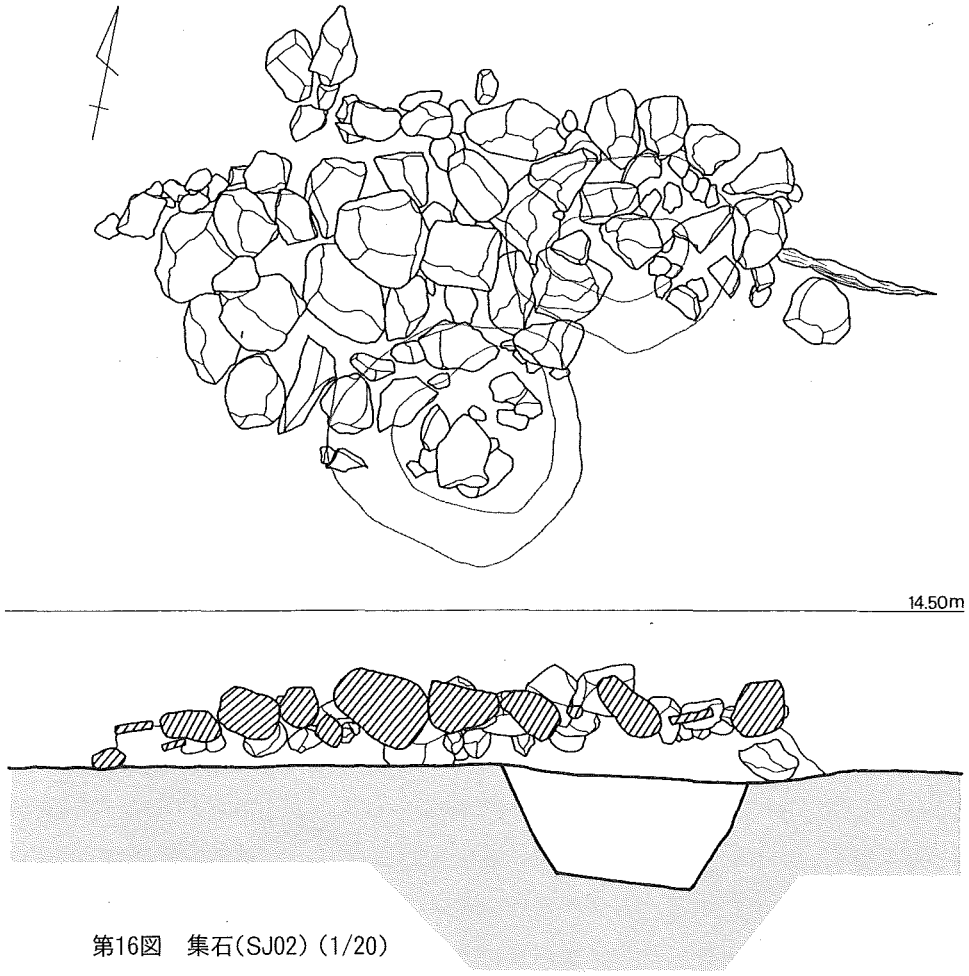
W 4区から30cm以下の礫が暗茶褐色の砂質土とともにまとまって検出された。わずかながら陶磁器片，瓦片も集石内には混入していた。南北幅約2.0m，東西幅約1.2mになる。礫を取り除くと，掘立柱建物柱跡(SB08)および柱穴列(SA04)を構成する柱穴が確認された。

集石(SJ03)(第17図)

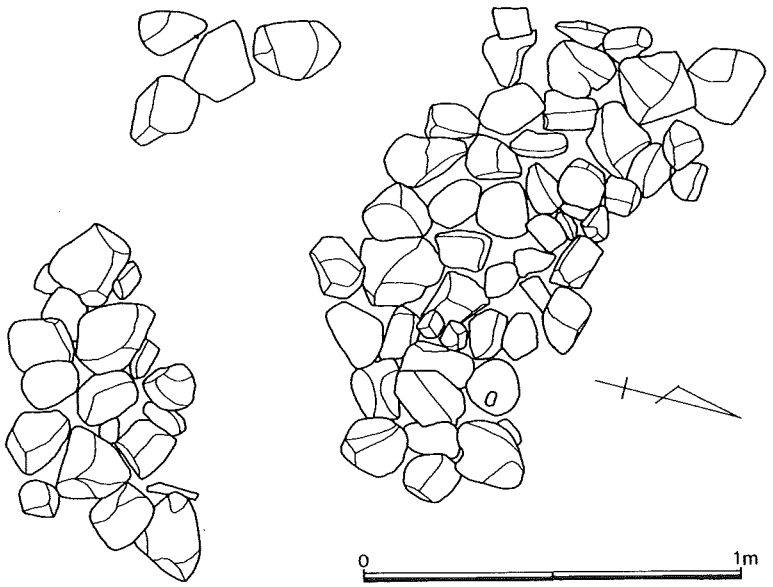
W 6区において整地面上よりの検出で，西端は調査区外へ広がると思われる。また，東端も後世の撹乱によって失われた可能性がある。SJ03は円礫が主体を占め，当調査区から検出した他の集石が角礫を主体としているのに対し，様相を違わせている。



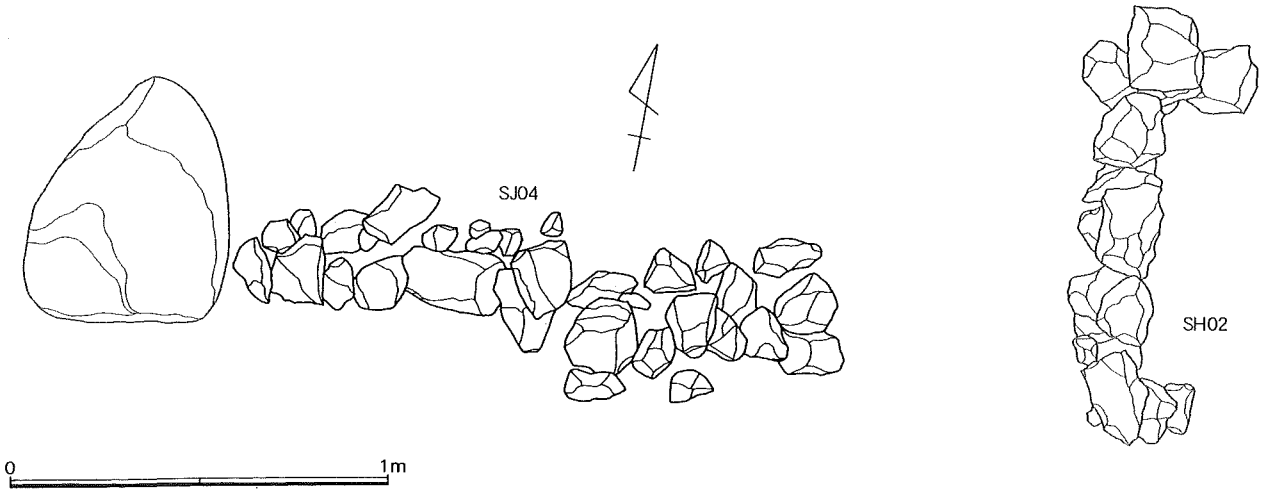
第15図　集石(SJ01)(1/20)



第16図　集石(SJ02)(1/20)



第17図　集石(SJ03)（1／20）



第18図　集石(SJ04)（1／20）

集石(SJ04)(第18図，図版3)

石組み遺構(SH02)の西側から柱穴列(SA05)を横切るようにして検出された。10～20cm大の礫が東西約2.0mの列状に配されている。西端には，3層中に自然堆積している60cm大の石が確認されたが，集石(SJ04)に伴うかどうかは不明である。

瓦溜まり(SY01・SY02)(第19図，図版3)

W 6区からW 7区にかけての調査区北西隅付近に確認された。周辺は北から南への傾斜をなくすため地山層の一部を削平し，その上を赤茶褐色の粘質土をたたきしめて整地面を造成している。瓦溜まりはこの整地面上からの検出である。わずかながら拳大以下の小礫や「タタキ」を含んで平瓦，丸瓦の破片が平面的にまとまって出土した。完形の瓦はほとんどない。大きく2つのまとまりがみられ，SY01は南北0.9m，東西1.0mを測るが，東側は後世の撹乱によって一部が失われたものと思われ

第19図　瓦溜まり(SY01・02)(1/20)

る。SY02は南北1.6m，東西1.4mを測る。瓦は規則正しく敷き並べたというような印象はなく周辺への広がりも認められないことから，投棄したと考えるのが妥当かと思われるが，平面的な出土状況であることから足場などとして利用したことも考えられる。

掘立柱建物跡(SB08)(第20図，図版1・4)

W2区からW6区にかけて検出した桁行8間，梁行1間の建物跡である。実長で桁行16.8m，梁行2.0mを測るが，桁行についてはさらに調査区の南側へ拡張する可能性をもつ。主軸はN10°30′Wをとる。柱穴の掘り方は径60～90cmで，深さは概ね50～70cmを測るが，建物北半部分の柱穴については軟質の3層からではなく硬質の地山へ直接掘り込んでいるため，径が大きく深さは浅くなる傾向がみられる。一間の間隔は，2.1m前後でほぼ一定する。時期は，出土遺物より17世紀後半から18世紀前半である。

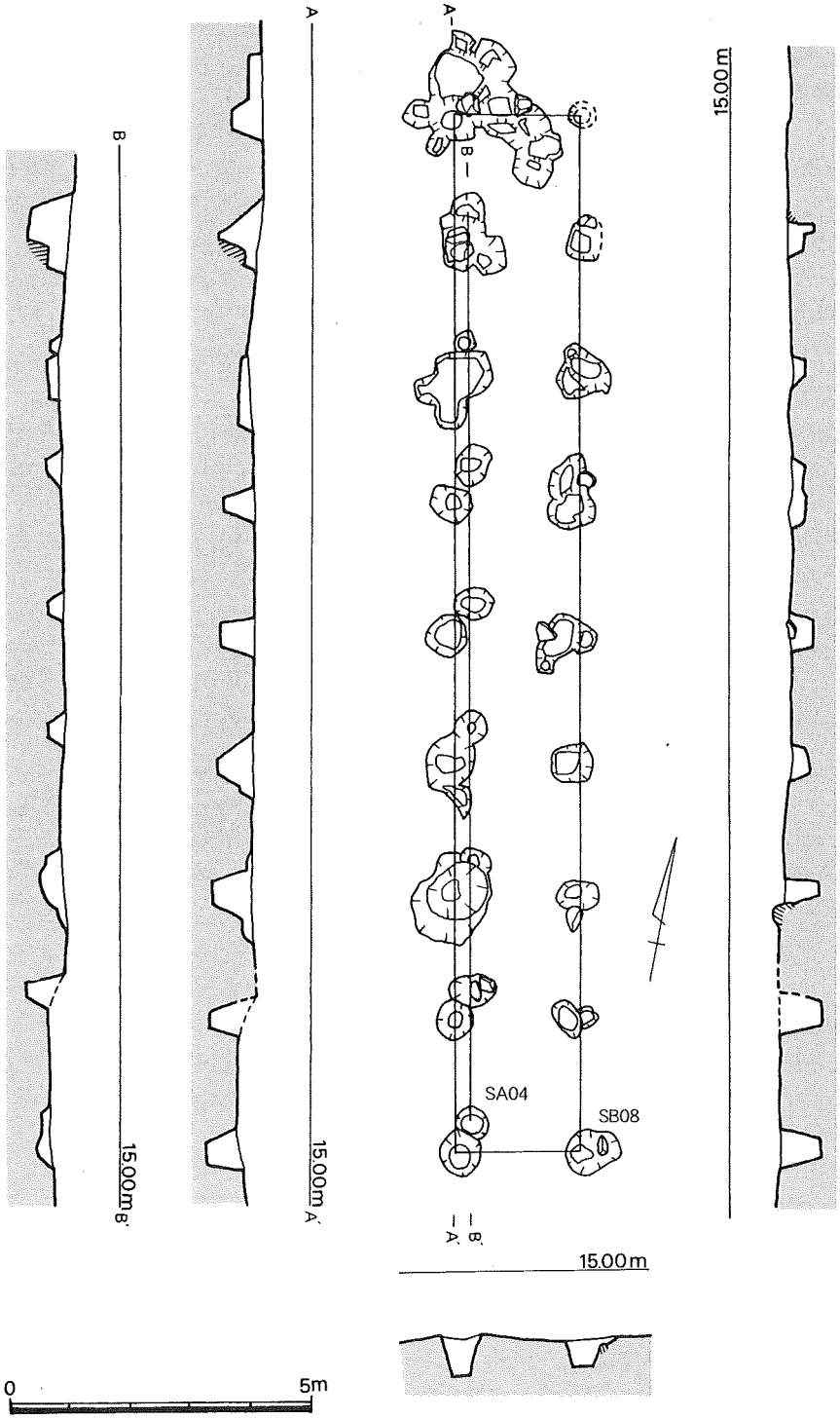
柱穴列(SA04)(第20図，図版4)

W2区からW6区にかけて8個の柱穴列を検出した。主軸はN11°Wと掘立柱建物跡にほぼ揃っている。調査区の南側にさらにのびる可能性があるが，検出部分の実長は14.7mになる。柱穴の間隔は南から順に2.1m，2.1m，2.2m，2.0m，2.2m，2.0m，2.1mを測り，2.1m前後で揃っている。時期は，出土遺物より17世紀後半から18世紀前半である。

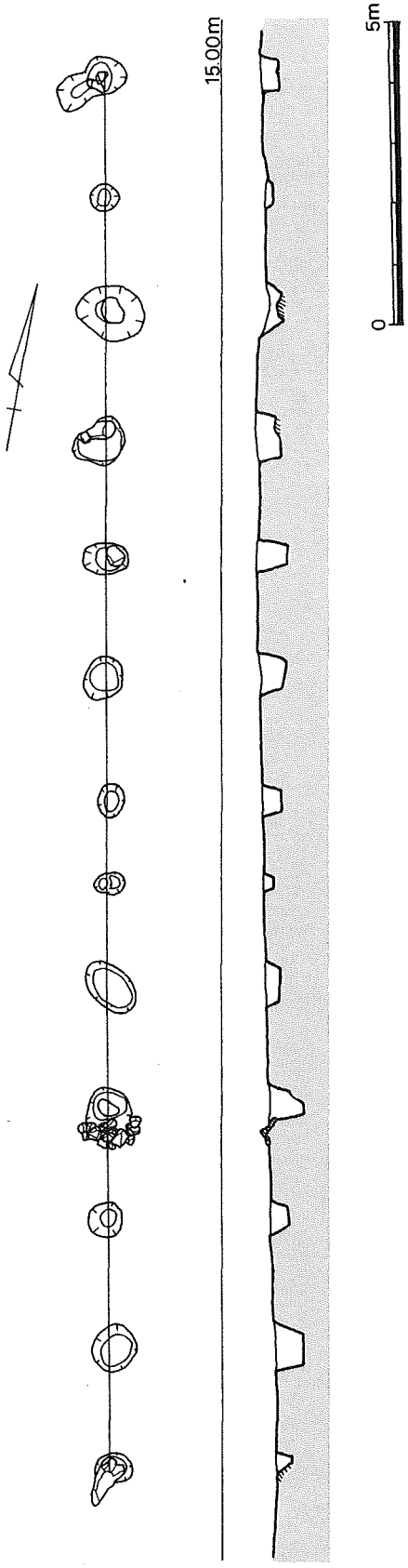
柱穴列(SA05)(第21図)

E2区からE7区にかけて13個の柱穴が南北に列をなす。南北両端は調査区外へ延長する可能性もあるが，検出部分の実長で22.7mを測る。主軸はN10°30′Wをとり，掘立柱建物跡(SB08)や柱穴列(SA04)とほぼ一致する。柱穴の間隔は，南から2.0m，2.1m，1.9m，2.0mとほぼ一定

しているが，第６間と第７間は 1.6m，1.3m と足並みが乱れ短くなる。それより北の部分は，順に 2.0m，2.0m，2.0m，2.0m，1.8m，2.0m となり，再びほぼ一定の刻みとなる。ただ，柱穴間の平均は，第６・７間を除いても 1.98m となり，掘立柱建物跡(SB08)や柱穴列(SA04)に比べるとやや短い。他の柱穴の覆土が灰褐色土なのに対し，第６・７柱穴の覆土は炭化物混じりの明茶褐色を呈し間隔も異なることから，軸を一にする南北２つの柱穴列と解することもできる。時期は，出土遺物より 17 世紀前半の森岳城創建時の頃と考えられ，今回の他の出土遺構より先行する。



第 20 図　掘立柱建物跡(SB08)，柱穴列(SA04)（1 / 20）



第21図　柱穴列(SA05)（1/120）

井戸(SE01)

調査区東壁に一部を残して，E 6区からの検出である。直径は130cmを測る。溝内の西側石列を一部こわしての掘り込みで，内壁面は「タタキ」によって整えられ，外壁面は20cm前後の自然石が張り付けられている。井戸内にはまだ水が湧いており，礫が充填してあった。混入する出土遺物から近代以降の廃棄とみてよかろう。出土遺物には蹄鉄33個も確認された。当調査区周辺は，絵図によると少なくとも18世紀後半には厩として利用されていたことがうかがわれるが，蹄鉄の普及は明治期以降である。近代に入っても厩としての機能が継続していた可能性が考えられる。

今回確認された遺構は，掘立柱建物跡1，柱穴列2，溝跡1，石組み遺構2，土坑5，集石4，瓦溜まり1，井戸1である。時期としては2時期が認められ，柱穴列(SA05)が17世紀前半，その他の遺構は17世紀後半以降とみられる。遺構の主軸方位は，掘立柱建物跡(SB08)がN10°30′W，柱穴列(SA04・05)がそれぞれN11°WとN10°30′W，溝(SD05)がN11°Wをとり，平成11年度に検出された三ノ丸東側の堀石垣(SD01)ライン，N10°Wとほど同一であり，森岳城築城以来の地割りに則っている。

さて，今回の調査による検出遺構について，絵図の中に描かれた三ノ丸東側部分との対応を図りながら考えてみたい。

検討する絵図は以下の通りである。(第22・23図)

1　「島原城内外大図」
　　寛文12年(1672)の銘があり，松平忠房時代の作成

2　「森岳城郭内図」
　　戸田時代の作成か

3　「肥前南高来郡島原城図」
　　戸田時代の作成か

4　「森岳城図」
　　寛政4年(1792)から文政2年の作成と推定

5　「島原城下之図」
　　寛政年間以前の作成か

6　「島原大変図」
　　寛政4年(1792)以降の作成

7　「島原藩士屋敷図」
　　元治2年(慶応元年・1865)の作成

まず，三ノ丸を囲む堀についてみてみると，１は三ノ丸南側の表御門から東に向かって堀が描かれており，外郭線に沿って北に曲がり，三ノ丸北東隅の突出部までたどり着くとそこで途切れる。その他の絵図においてはさらにそこから東に折れて二ノ門脇まで延長されている。三ノ丸東側と外とを結ぶ橋については，１は全体的に簡略化して表現しているためか描写がないが，３～７は２本の橋がかけられており，２についても南側の一本のみが確認できる。

竹中はこの２本の橋について，現在の市立第一小学校および県立島原高等学校の正面玄関へと続くスロープが対応するとの見解を示している。このことをおおよその目安とすると，今回の調査区はすぐ南側に県立島原高等学校の玄関前スロープが通ることから，三ノ丸東側にかかる２本の橋の内，北側の橋を出てすぐ左手の地点と言うことになる。この地点は絵図においては堀沿いに通路が通っており，北側へ進み，突き当たりを右へ折れて二ノ門を出れば，田町門から城外へ抜けることができる。

通路沿いの敷地の状況をみると，１においては「侍屋敷」の表記があるが，その他の絵図においては「御厩」，「厩」，「御馬屋」，「馬場」の表記がみられ，「下室所」，「下台所」と隣り合っている。馬の飼育が行われた場所であることは確実であろう。ただ注意を要するのは，竹中も指摘する通り，馬屋(馬場)の規模が絵図によって異なることである。２においては馬屋部分と堀沿いの通路とをわける建物の描写が南北で異なり，北側の馬場に対応するであろう部分がやや小振りであるが，敷地幅については南側と同じである。一方，４・６・７においては，他の絵図に対して馬屋の北側部分が南側部分に比して小さく描写してあり，その分西側を通路部分が広く描かれている。７の描写は最も詳細で，「御馬屋」と「馬場」とが一本の通路を隔てて描かれており，馬場の方が幅が狭い。また，５においては北側部分の馬場の描写はなく完全な空き地になって竹林が描かれている。おそらくは，こうした馬場部分の規模が７以外の絵図においては馬屋の敷地に含めてまとめて表現されたのであろう。

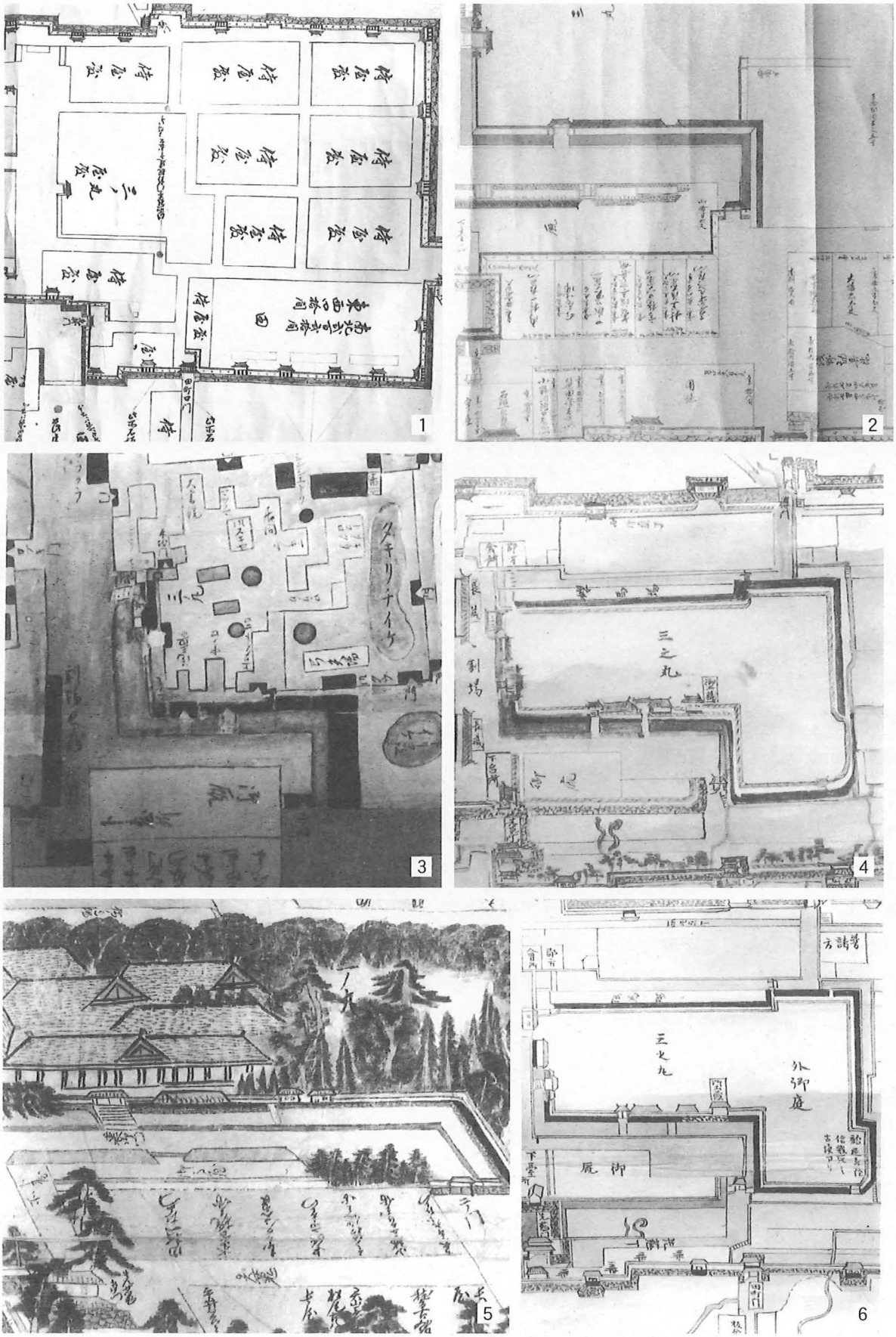
それでは今回の調査による検出遺構との対応関係について述べたい。掘立柱建物跡は桁行８間以上，梁行１間の長屋状の建物である。また，溝が柱穴列(SA05)をはさんで東側に走る。SA05，SB08 と SD 05 との間隔はそれぞれ 3.5m，約 5.5m である。

中世以降の武家社会における馬屋の構造については，絵図の中に見る描写からいくつかの点が明らかである。16 世紀末に狩野派によって描かれたとされる『繋馬図(厩図)屏風』(東京国立博物館蔵)を見てみると，土間を基本とする農村における馬屋と異なり，立て場には板敷きの間があてられ，一間ごとに馬一頭を入れている。それに伴い，馬をつなぎ止めるのには轡つなぎ・腹掛けを採用し，土間での飼育に一般的な「ません棒」と呼ばれる木製のしきりは用いていない。

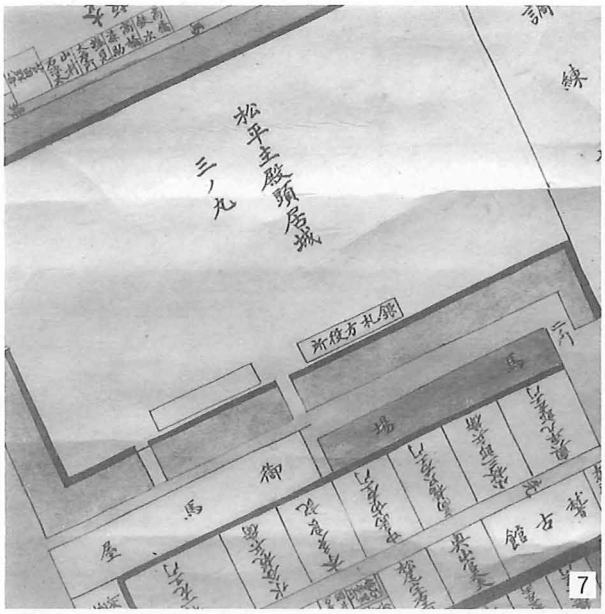
彦根城における元禄年間の馬屋にも共通する様相を見ることができる。やはり，馬屋はＬ字形の平面を呈する長屋状の建物で，馬は一頭一頭が区画された板敷きの間に入るようになっている。また，馬屋の周囲には排水のための溝が配されている。

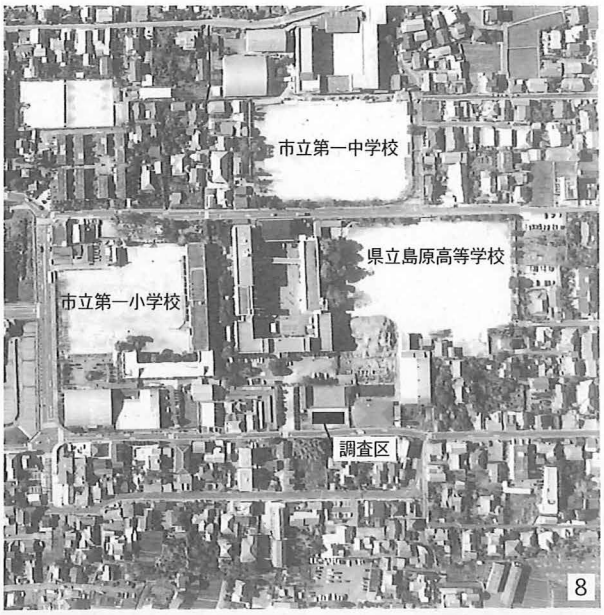
これらの絵図や彦根城の例と照らし合わせると，長屋状の掘立柱建物とそれに伴う可能性のある溝跡が検出されたことは，森岳城関係の図にも対応するように馬関連施設の遺構という位置づけができるのではなかろうか。ただ，SA05 については，時期が 17 世紀前半代まで遡ると考えられ，一連の馬関連施設として捉えるより，先行する馬屋もしくは別の性格の建物であると判断しておきたい。

また，今回調査区の北側を中心に検出された整地面は，同様のものが平成 12 年度の調査においても検出されていて，三ノ丸東側を堀沿いに通う通路遺構と考えてよいであろう。



第 22 図　森岳城関連資料①





第 23 図　森岳城関連資料②

平成 11 年度の調査において検出された SD01 は，森岳城三ノ丸の東側部分に設けられた堀に対応すると考えられ，対面するもう一方の堀石垣が存在することが想定される。しかしながら，平成 11 年度・12 年度の調査時には確認できておらず，今回の調査においても調査前に検出の可能性を想定していたが，確認はできなかった。このことを考え合わせると，SD01 の堀幅は最低でも 10m，最大限に見積もっても 17m という平成 11 年度・12 年度の調査結果を踏襲することができた。今回の調査区近辺でいえば，SD01 は弓道場の東半分あたりを南北方向にのび，北側では平成 12 年度検出の SD04 と交差していたものと考えられる。

島原は古くは優良馬の産地として名をはせた。藩政時代には豊州，南部，肥後，薩摩，琉球といった日本各地の先進地産の優良馬を取り寄せたり，駒帳を作成し，血統など細やかな管理に努めた。こうして築き上げられた島原馬の名声は，松平忠房の治世にその施策の基礎がはじまる。そして，その後およそ 200 年にわたって優良馬の生産体制が整備され，廃れることなく継続された。こうした施策の中心として御用馬の管理を司り，藩内における馬政の統括を行ったのが「御厩」であり，今回の調査においてその「御厩」跡と思われる一連の遺構が検出されたことは，今後森岳城の全容を解明していく中で貴重な資料となるであろう。

参考文献

林　銑吉編 1954 『島原半島史』長崎県南高来郡市教育会

入江　清 1972 『島原の歴史』藩政編　島原市役所

本田秀樹編 2002 『森岳城跡』長崎県教育委員会

平井　聖 1993 『ビジュアル百科　江戸事情』第 5 巻 建築編　1993　雄山閣出版

宮沢智士 1997 「厩」『日本史事典』平凡社

第 22 図・第 23 図出典

1・2・3・4・6・7：島原図書館松平文庫所蔵，5：長崎県立図書館蔵

第３節　出土遺物

今回の発掘調査では約1,800点の遺物が出土している。内訳は内容確認調査が約400点，本調査は約1,400点であった。大半を占める瓦類は選別して持ち帰るようにしたため，全体的には低い数値にとどまっている。出土遺物の傾向や数量的なものについては第４章でとりあげ，ここでは代表的な土器・陶磁器類と瓦類について紹介していくことにしたい。

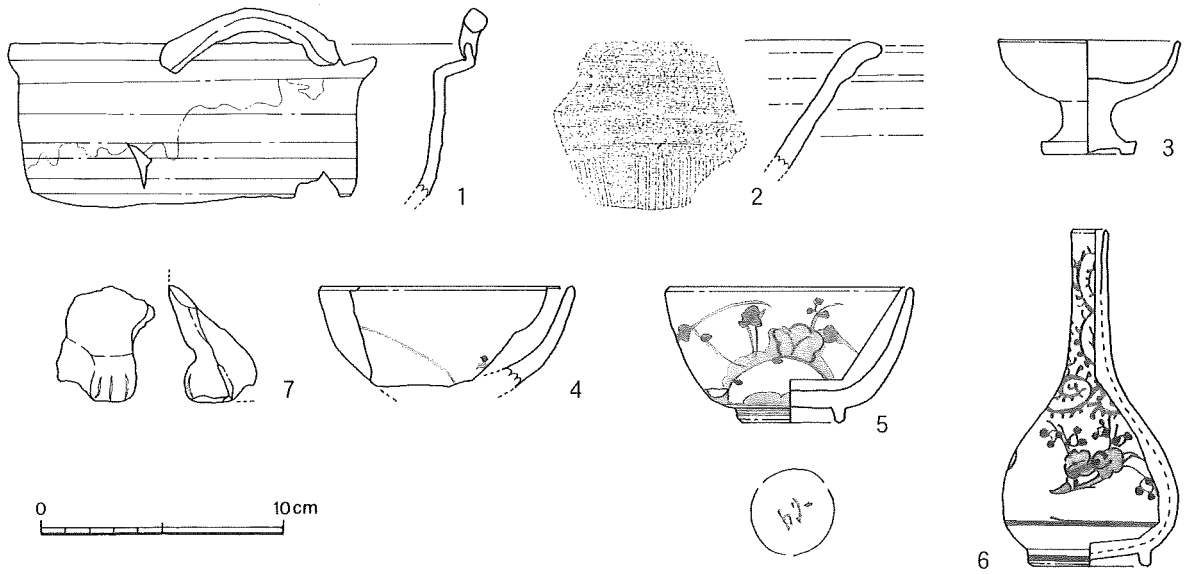
１　土器・陶磁器類（第24・25図，図版５・６）

第24図は確認調査の試掘坑（V2）で，不明石組み遺構に伴って出土した遺物を掲載した。本調査ではこの遺構をSH02として取り扱っている。それぞれの出土地点は，第６図を参照されたい。

１は土鍋である。口縁部は鉤形に張り出し，取っ手をつける。内外面に鉄釉が施される。２は擂鉢である。口縁部を肥厚させて外反させる。擂目は11＋αを１単位とし，上端をナデて揃えている。３は生焼けの仏飯器である。坏部は全体に丸みを帯び，内外面に釉を施す。高台のつくりはしっかりしている。４・５は所謂くらわんか碗である。４は体部に草花文を描く。胎土は灰白色で，呉須の発色は鈍い。５はやや腰が張った体部に，雪輪草花文を描く。高台内には「大明年製」の崩れた裏銘を施す。器壁は厚く，呉須の発色も鈍い。６は鶴首瓶である。首部から口縁部にかけてはほとんど平行に伸び，口縁端部でわずかに開く。肩部のラインは滑らかで，下膨れの体部にしっかりした高台がつく。文様は口首部に蛸唐草，体部に梅樹文を描く。７は土製置物である。型押し成形でつくられた素焼きの犬か。１～７の遺物から，SH02は概ね18世紀後半以降の年代が考えられよう。

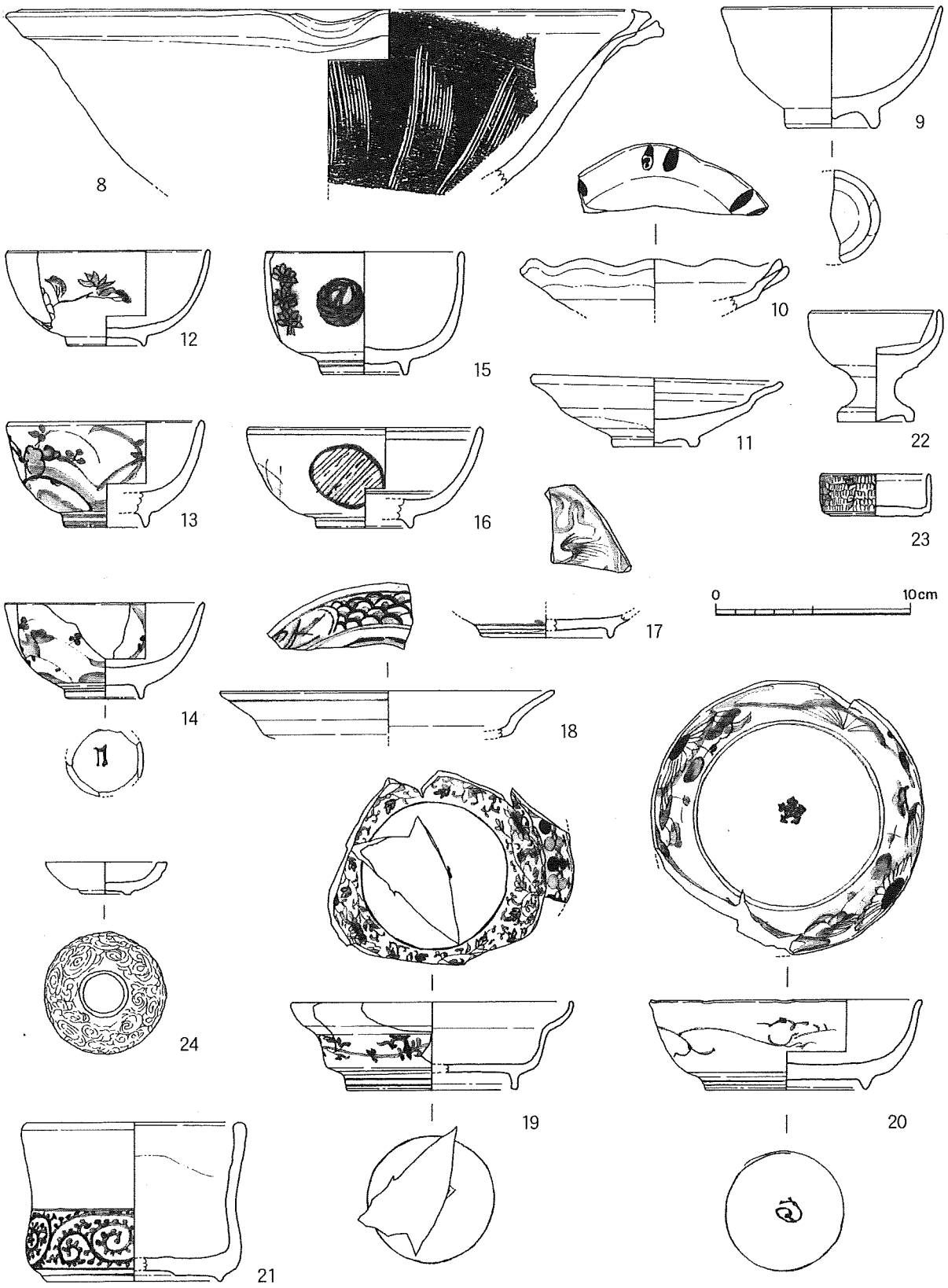
第25図は今回の本調査で出土した遺物である。８は擂鉢である。全体はロクロ成形で，口縁端部は内側へ突出させる。釉は口縁部のみかかる。擂目は12条を１単位に間を空けて施され，先端を揃えることはしない。Ｅ４区SD05出土。９は体部外面に銅緑釉を施した碗である。高台は露胎で，畳付けには砂目跡がつく。高台内はトキン状の削りがみられる。Ｅ５区SD05出土。

10は絵唐津の皿である。口縁直下に段をもち，外面体部は露胎となる。口縁部はなぶり口になっており，内面には鉄釉で文様を描く。Ｅ６区第２層出土。11は溝縁皿である。胴部は屈曲して外反する口縁部にいたる。口縁部内面は段がつく。高台は露胎で，内部をトキン状に削られる。撹乱層出土。



第24図　内容確認調査（Ｖ２）出土遺物（１/３）

12～16は染付碗である。12の体部の器壁は薄く，高台は低い。SH02出土。13・14はくらわんか碗で，体部に雪輪草花文を描く。ともに器壁は厚く，呉須の発色は悪い。14には「大明年製」の崩れた裏銘がある。13はＥ２区第３層，14はＷ２区第２層出土。15は体部の腰が張るタイプで，コンニャ

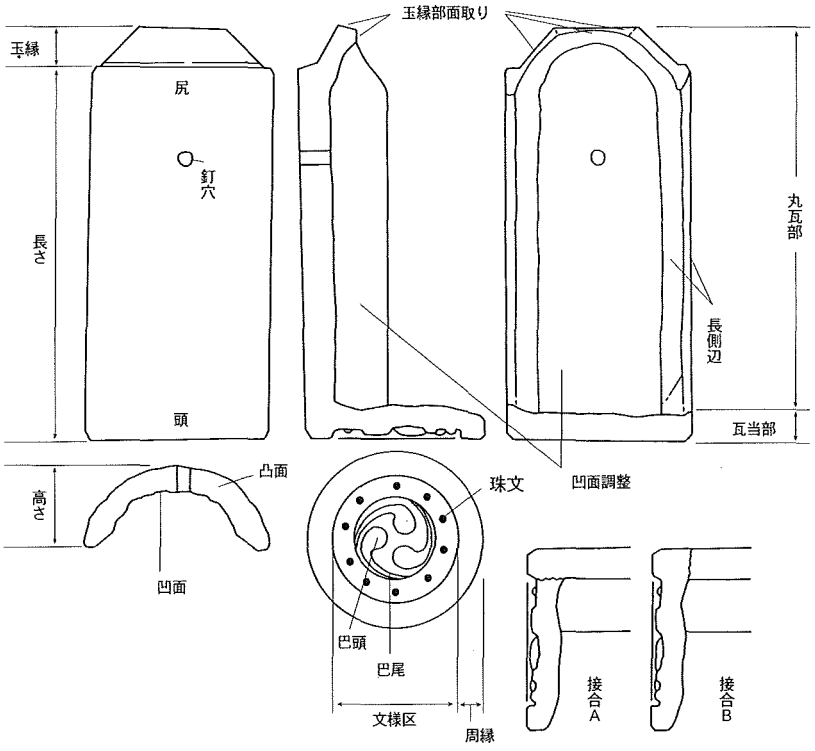


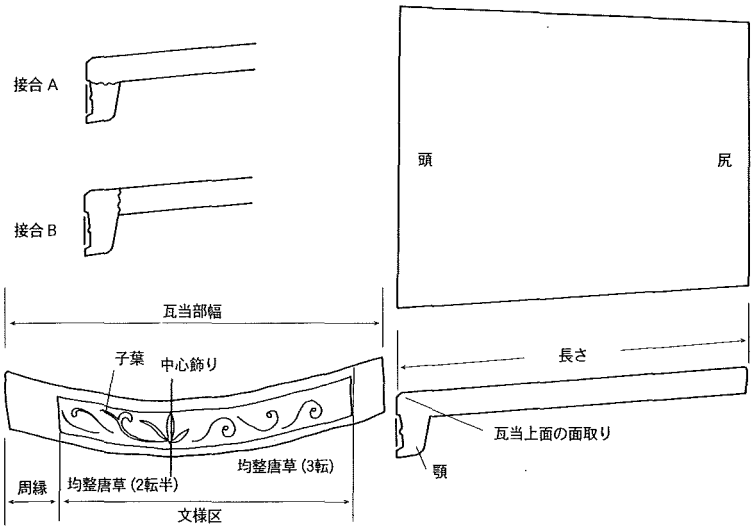
第25図　本調査出土遺物（1/3）

ク印判の団鶴松文を施す。E2区第3層出土。**16**は口径が大きく，体部に丸文を描く。見込みは蛇ノ目釉剥ぎして，アルミナを塗布する。SY01出土。

17・18は明青花皿である。**17**の高台内は露胎で，見込みに玉取り獅子を描く。E３区第２層出土。**18**は腰折れのつば皿である。小野正敏氏のＦ群に相当する。Ｗ３～Ｗ４区第２層出土。

19は瀟洒なつくりの深皿である。口縁部は輪花を描き，端部に口銹を施す。口縁内面は瓢箪文，内側面は牡丹唐草文を配し，見込みには手描き五弁花を入れる。裏文様にも唐草を巡らす。Ｗ３区出土。**20**も深皿で，端反りの口縁部は輪花を描く。内側面に扇文と半菊文，見込みにコンニャク印判で五弁花を施す。裏文様は唐草を入れ，高台内に「渦福」の裏銘をもつ。**19**の品質の高さに比べ，**20**の器壁は厚ぼったく，鈍重な感がある。Ｅ２区第３層出土。





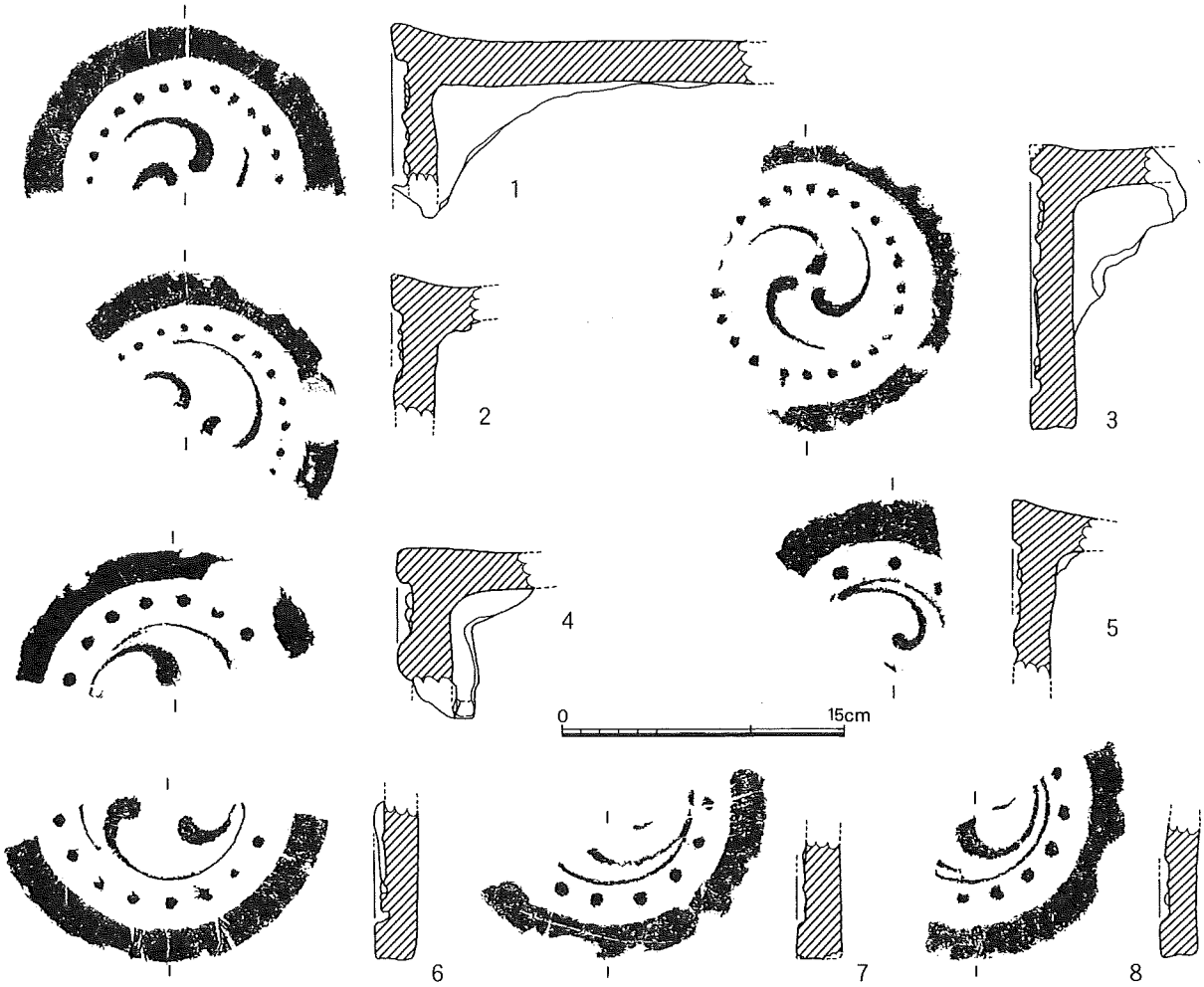
第26図　瓦の部分名称

21は青磁染付の香炉である。胴部上半～口縁部に青磁釉を施し，下半は染付で蛸唐草文を描く。半筒形の胴部は腰の辺りでくびれて丸味をおび，蛇ノ目凹型高台がつく。SH02出土。**22**は仏飯器である。坏部は浅く，高台内の刳り込みは小さい。Ｅ２区第２層出土。**23**は小形の段重で，Ｅ５区SD05出土。**24**は体部外面に蛸唐草文を型押しした紅皿で，Ｅ６区第２層出土。

2　瓦類(第26～28図，図版6・7)

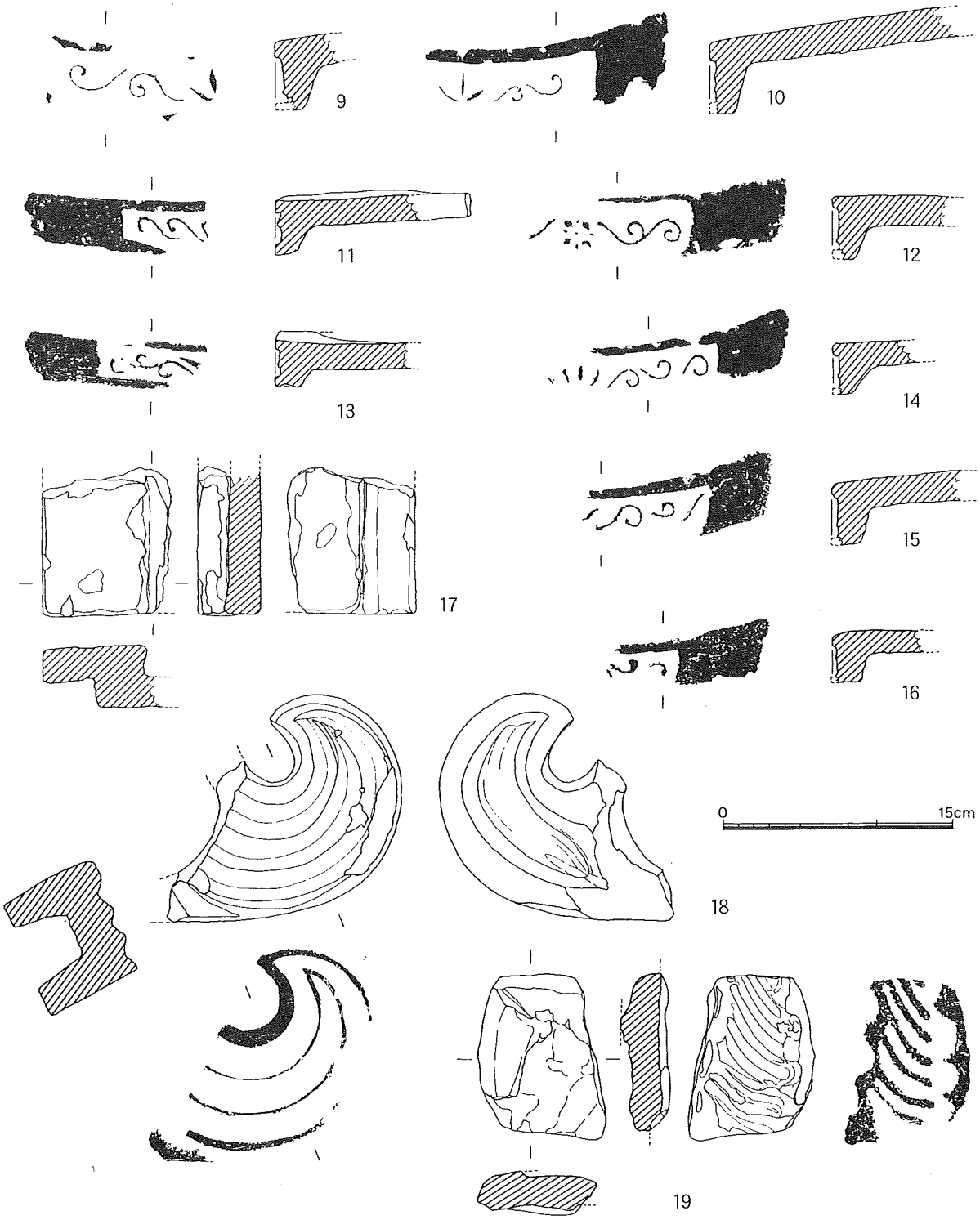
出土した瓦には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・桟瓦・鬼瓦・目板瓦がある。ここでは主に軒瓦について報告する。なお，瓦の部位・名称に関しては第26図に準じた。また，観察表(第２表)に示した圏線とは，軒丸瓦の巴尾部が完全につながっているものを指し，接合は丸(平)瓦先端が瓦当部表面に達するものを「接合A」，瓦当部裏面までのものは「接合B」と表記した。

第27図は軒丸瓦である。**1**は瓦当に左巻きの三巴文を配す。巴頭は小さく，巴尾は短い方である。珠文も小さめで，推定26を数える。瓦当面の彫りは比較的浅く，接合方法はＢである。Ｅ８区第２層出土。**2**は巴頭は小さく，巴の巻きが強いのを特徴とする。巴尾もシャープで長くのびる。珠文は小さく，推定26を数える。接合方法はＢである。Ｅ２区第２層出土。**3**の巴文は１に近い。巴頭部のくびれは明瞭で，巴尾の断面はきれいな三角形を呈す。珠文はやや大きめで，23を数える。接合はＢである。確認調査時のＮ１第２層出土。**4**は巴頭部が大きく誇張され，頂部は平らに均されている。巴尾部は長く伸び，互いに近接する位置にある。珠文径も大きく，推定23か。全体的に彫りが深く，文様にメリハリがある。接合方法はＢである。Ｗ２－Ｅ２区第２層出土。**5**は巴頭部のくびれが明瞭で，巻きが強いタイプである。巴尾部はつながって圏線をなす。珠文径は大きく，推定で12を数える。瓦当の彫りは浅く，巴はつぶれた格好になっている。接合はＢで，Ｗ３区第２層出土。**6**は**4**に近い。誇張された巴頭の頂部はつぶれて，断面台形状をなす。巴尾も長くのびて互いに接するが，圏線状にはならない。珠文も高く突出し，推定で18を数える。瓦当接合はＢである。Ｗ６区第２層出土。**7**は**5**と同じで，瓦当部の彫りは非常に浅く，長くのびた巴尾部はつながって圏線をなす。瓦当面に擦痕があり，文様は全体的につぶれている。珠文は大きい方で，推定16を数える。接合はＢ接合で，確認調査時のＮ１第２層出土。**8**も瓦当全体の彫りは浅く，巴の断面は肉薄である。巴尾は短く，これとは別に圏線を外周に巡らす。推定16を数える珠文は大きめで，頂部はつぶれているものもある。Ｂ接合で，Ｗ３区第２層出土。



第27図　軒丸瓦（1/4）

第28図の**9**～**16**は軒平瓦である。**9**は文様区に均整唐草文をもつ。中心飾りは肉太の三葉で，唐草は左に２転する。唐草の巻きは強く，線はシャープで，先端部は巴頭状になる。顎の断面は方形に近く，接合Ａを行う。Ｗ７区第２層。**10**も均整唐草で，中心飾りは三葉を有する。文様の線は細く，華奢になる。顎の断面は方形で，接合方法はＡである。顎下端から約５cmの所に，瓦当面に平行する条線が施される。Ｅ５区第２層出土。**11**は中心飾りは不明だが，出土例から判断すると三葉か。唐草も本来は３転するものであろう。顎断面は台形で，接合Ｂである。Ｗ６区第３層出土。**12**は中心飾り



第28図　軒平瓦，目板瓦，鬼瓦ほか（１/４）

に四弁花をもつ。唐草は右に２転し，巻きは連続する。唐草の線は１本の単調な隆線で表現されている。顎断面は台形をなし，Ｂ接合を行う。SJ01 出土。**13** の中心飾りは不明。均整唐草文は連続して左に３転する。瓦当面全体をナデ調整しているのか，文様はつぶれている。顎の断面形は台形状を呈し，接合はＢ接合である。Ｗ３区第３層出土。**14** は中心飾りに三葉を配し，均整唐草文はそれぞれ独立して右に３転する。唐草は大きく巻いて展開するのを特徴とする。顎下端の幅が極端に狭いため，断面は三角形に近い。接合はＢで，Ｗ６区第２層出土。**15** は中心飾りを欠損するが，三葉か。唐草は本来は３転していたようで，笵の切断により３転目の一部は失われている。唐草先端の巻きは強い。顎断面は方形に近く，接合Ａである。Ｅ３区第２層出土。**16** の中心飾りは不明。均整唐草の巻きは弱く，先端は巴頭状をなす。現状では独立して右に２転する。顎の断面は方形で，Ａ接合を行う。Ｗ３区第２層出土。

17 は目板瓦である。Ｗ４区第３層出土。**18** は鬼瓦である。左右に大きな反りがつき，中央は円形の刳り込みが施されていたようだ。全面が燻しで銀化している。反りの断面はＭ字状をなし，瓦の軽量化を図っている。確認調査時のＮ２第２層出土。**19** は器種不明。何かの鋳型か。粘土を複数重ねて型作りをしたようで，鋳込みをした際に外面は部分剥落したと思われる。SA05 のＰ７出土。

図版番号	出土地点	直径	周縁幅	珠文		巴			接合	備考
				直径	数(推定)	頭直径	方向	圏線		
		(cm)	(cm)	(cm)		(cm)				
1	Ｅ８第２層	16.2	1.85	0.60	13(26)	1.2	L	無	B	
2	Ｅ２第２層	15.2	1.80	0.55	12(26)	1.2	L	無	B	
3	試掘(Ｎ１第２層)	15.0	1.50	0.80	23	1.1	L	無	B	
4	Ｗ2-Ｅ２第２層	16.0	1.80	0.80	7(23)	2.2	L	無	B	
5	Ｗ3第２層	16.4	2.25	1.10	3(12)	1.6	L	有	B	
6	Ｗ6第２層	16.0	2.00	0.80	9(18)	2.1	L	無	B	
7	試掘(Ｎ１第２層)	16.6	1.85	0.90	6(16)	－	L	有	B	
8	Ｗ3第２層	16.0	1.90	1.00	6(16)	－	L	有	B	

図版番号	出土地点	残存幅 (cm)	高さ (cm)	文様区				唐草					接合	瓦当面上端の面取り	備考
				中心飾		幅 (cm)	高さ (cm)	反転数	線種	巻き	連続性	子葉の有無			
				文様	線種										
9	Ｗ７第２層	14.3	4.35	三葉	細	11.8～	3.00	2	細	強	不連続	無	A	有	
10	Ｅ５第２層	16.2	4.55	三葉	細	10.8～	2.80	2	細	強	不連続	無	A	有	
11	Ｗ６第３層	12.3	3.60	－	細	5.8～	2.05	2	細	弱	不連続	無	B	有	
12	ＳＪＯ１	17.3	4.10	四弁花	台形	11.0～	2.80	2	細	強	連続	無	B	有	
13	Ｗ３第３層	12.0	3.00	－	太	12.0～	3.00	3	細	強	連続	無	B	無	
14	Ｗ６第３層	17.0	3.35	三葉	細	12.3～	2.10	3	細	強	不連続	無	B	有	
15	Ｅ３第２層	13.0	3.95	－	細	8.7～	2.55	2.5	細	強	不連続	無	A	有	
16	Ｗ３第２層	11.0	2.85	－	－	4.8～	1.95	－	太	弱	不連続	－	A	有	

第２表　軒丸瓦・軒平瓦観察表

第4章　まとめ

森岳城跡の発掘調査は今回で通算3度目になる。これまでは専ら三ノ丸内部を主な調査対象とし，堀石垣の一部や建物遺構を検出してきた。今回の調査区は平成12年度と同じ三ノ丸東堀端にあたり，絵図面では御厩，侍屋敷等の記載が見える。ここでは調査で確認された遺構と遺物について，簡単なまとめを行ってみたい。

遺構は溝跡(SD05) 1，石組み遺構(SH02・03) 2，土坑(SK10～14) 5，集石(SJ01～04) 4，瓦溜まり(SY01・02) 2，掘立柱建物跡(SB08) 1，柱穴列(SA04・05) 2，井戸(SE01) 1を確認した。森岳城の場合，城割に際して高度に規格化された直線ラインを多用していることはこれまでの指摘で明らかである。遺構の主軸方向をみると次の2つに大別できる。森岳城の地割りに則ったものと，そうでないものである。後者にはSK10，SY01・02，SJ01～03，SE01があり，城主の求心力が失われ，城郭としての機能が停止した時期の遺構と考えられる。専ら19世紀以降であり，出土遺物もそのことを裏付ける。

前者の場合，遺構の主軸はほぼ南北方向で揃い，城割の規格に従う。築城当初の遺構と考えられるのはSA05で，ピットの覆土は他と明らかに異なる。唐津系溝縁皿等が出土し，17世紀前半台であることは確実である。次にくるのはSA04で，SB08と一部重複するものの，遺構の切り合い関係からSA04が先行する。SA05・04ともに遺構の性格は不明である。

後続するのがSB08とSD05，およびその関連遺構であろう。SB08は桁行8間，梁行1間の長屋風の掘立柱建物跡である。ピットからは17世紀後半～18世紀前半の遺物が出土している。松平時代(寛文12年銘)の作とされる「島原城内外図」(第22図1)には侍屋敷とあるが，建物としては貧弱すぎる。SD05は南北に走る石組み溝であったと考えられる。ただし，平成12年度の調査では溝の延長上に遺構は確認されておらず，小規模な用排水路とみるのが妥当であろう。SH02・03はSD05に付随する引き込み口になるものか。SK11～13やSJ04も同種の関連遺構と考えたい。遺構の時期は概ね17世紀後半から18世紀代におさまりそうである。当該地は戸田・松平時代以降の絵図(第22図2～5，第23図)では「御厩」・「厩」の表記が定着しており，SB08やSD05は厩施設の可能性をあげておくことにする。

遺物は土器・陶磁器や瓦類を含めて約1,800点が出土した。時期的には16世紀末～17世紀前半，17世紀後半～18世紀前半，18世紀後半～19世紀前半の3期に分けられる。16世紀末～17世紀前半の遺物はＥ３・５区やＷ２～４区で出土し，調査区の南側に偏る。17世紀後半以降はＷ２区やＷ５・６区で多く，東側は相対的に少ない。これは遺構の中心が西側に移行した結果によるものか。瓦類は瓦溜まりのあるＷ４～７区で多い。ただし，新しいタイプが大半を占め，廃城後に投棄されたものであろう。

内容確認調査のＧ３・Ｇ４，Ｎ１・Ｎ２でも遺物の出土があった。Ｇ３は瓦類が，Ｇ４では陶磁器類が多く，建物遺構の存在をうかがわせる。グラウンドは庭園や池があったとされるが，その範囲を含めて再検討する余地がありそうだ。Ｎ１・Ｎ２は軒瓦や鬼瓦があり，礎石も確認されていることから，屋敷内の主要建物があったことは間違いない。この一帯が三ノ丸の中心をなすものと思われる。

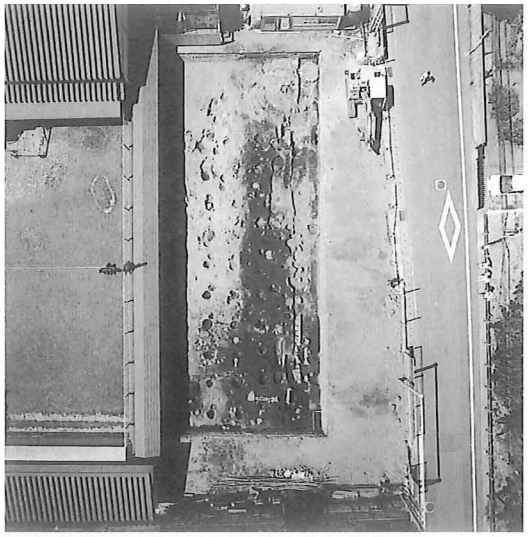
器種では大甕や擂鉢，粗製の染付碗が目立つ。上手の製品がほとんどみられないことは，城主空間と明確に区別されていた証左であろう。特異な遺物として蹄鉄や轡，鉛玉があり，「御厩」との関係を想起させる資料として興味深い。

城主		西暦	年号	島原藩関連事項	歴史事項
		1584	天正12	沖田畷戦で森岳の丘を有馬・島津軍の本陣とした	
					慶長 5　関ヶ原の戦
		1614	慶長19	有馬直純　日向延岡に転封	
					元和 1　豊臣氏滅亡，一国一城令
松倉	重政	1616	元和 2	領主として松倉重政　入封	
		1618	元和 4	森岳城築城に着工	
		1624	寛永 1	島原城（森岳城）完成	寛永 1　スペイン船来航禁止
		1627	寛永 4	キリシタン信者１６人を雲仙地獄に投じる	
		1630	寛永 7	マニラを攻撃するため偵察船二隻を派遣	
	重次	1635	寛文12	島原城之図	寛永12　明船の入港を長崎に制限
		1637	寛永14	島原の乱勃発で九州諸大名に動員令（幕府）	
				島原の乱	
		1638	寛永15	原城陥落	
				松倉重次氏の所領没収	
高力	忠房	1638	寛永15	領主として高力忠房　入封	
					寛永16　ポルトガル船来航禁止
					寛永18　オランダ人を出島に隔離（鎖国完成）
		1642	寛永19	幕府 九州諸藩に対し，島原半島への農民移住を命ずる	
		1649	慶安 4	幕府 四国小豆島の住民を島原半島に移住させる	
	隆長				明暦 3　明暦の大火
		1668	寛文 8	高力隆長仙台に追放される	
松平	忠房	1668	寛文 8	領主として福知山から松平忠房　入封	
		1674	延宝 2	桜町の大火（三の丸一部残し焼失）	
				諫早田町二門の瑣箒を以てその闔闢を監せしむ	
		1675	延宝 3	島原領内に悪疫流行	
		1684	貞享 1	肥前国嶋原城絵図	
					元禄 1　長崎唐人屋敷の造営に着手
		1689	元禄 2	肥前国島原城石垣破損所図	元禄 2　唐人屋敷完成
		1692	元禄 5	城前門外の板橋の修造成る	
		1693	元禄 6	公第邸を田屋敷（田町）に営み大いに園地を	
				鑿ち，退養の處と為さんと欲し，有司に命じて	
				工役を興し，假に泉屋敷と名づく	
		1695	元禄 8	肥前国島原城石垣破損所図	
	忠雄	1700	元禄13	肥前国嶋原城石垣崩修覆願図	
				島原城外曲輪石垣崩修覆願ノ添図	
		1706	宝永 3	嶋原城堀石垣崩所之絵図	
		1707	宝永 4	島原藩が２年にわたる領内検地で『大概様子書』作製	
					正徴 5　新井白石，海舶互市新例（正徴新令）発す
					享保 2　吉宗，享保の改革
					元文 1　清船入港数を年25隻に制限
	忠刻	1737	元文 2	島原藩で百姓一揆おこる	
		1746	延享 3	島原藩で５ヶ年の倹約令を出す	延享 3　清船入港数10隻，オランダ船２隻に制限
	忠祗	1749	寛延 2	島原藩松平氏と宇都宮藩戸田氏と所領入れ替え	
戸田	忠寛	1767	明和 4	島原藩　藩札６種類を発行	明和 4　田沼意次，側用人就任（田沼時代）
		1768	明和 5	幕府 島原藩預りの肥前彼杵郡・高来郡の	
				うち７ヶ村を長崎代官に付属させる	
松平	忠恕	1774	安永 3	島原藩戸田氏と宇都宮藩松平氏と所領入替	
					天明 7　松平定信，老中就任（寛政の改革）
		1792	寛政 4	雲仙普賢岳噴火，眉山崩落	
	忠憑	1793	寛政 5	島原藩校稽古館設立	
					文化 1　ロシア使節レザノフ長崎に来航
					文化 5　フェートン号事件
		1819	文政 2	島原藩主松平主殿頭，長崎港の番所等を巡視	
	忠侯				文政 6　オランダ商館医シーボルト来崎
					文政 8　異国船打払令
					文政11　シーボルト事件
					天保12　水野忠邦，天保の改革
					天保13　天保の薪水給与令
	忠誠	1843	天保14	島原藩の済衆館で九州初の死体解剖	
					弘化 3　米使ビッドル浦賀来航
		1847	弘化 4	島原藩千々石村の小作人ら，打ち毀しを行う	
	忠精	1849	嘉永 2	島原藩が島原海岸の測量図を作成	
		1853	嘉永 6	八年の歳月をかけた薬園完成	嘉永 6　米使ペリー浦賀来航
				（現在 国指定史跡 旧島原藩薬園跡）	ロシア使節プチャーチン長崎来航
	忠和	1854	嘉永 7	島原藩海岸部三ヶ所に砲台を築く	安政 1　日米和親条約
					安政 5　日米修好通商条約，安政の大獄
					出島オランダ商館廃止，領事館となる
		1863	文久 3	島原藩が農民の制を設け，小浜・加津佐・有馬に置く	
		1864	元治 1	島原藩　第一次長州征伐に出兵	
					慶応 3　大政奉還
明治		1867	明治 1	明治維新	
		1871	明治 4	島原の藩を廃し県とする	
				島原の県を廃し長崎県とする	
		1874	明治 7	大蔵省令により廃城　民間払い下げ	

第３表　島原藩関連年表

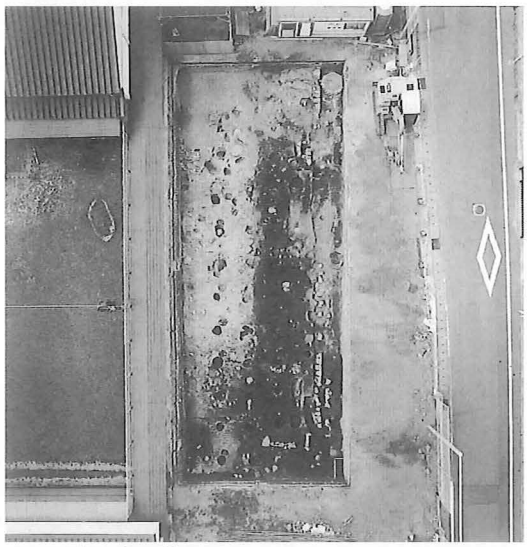
図　　版

1　調査区遠景①（南から）



2　調査区全景①

3　調査区遠景②（南から）

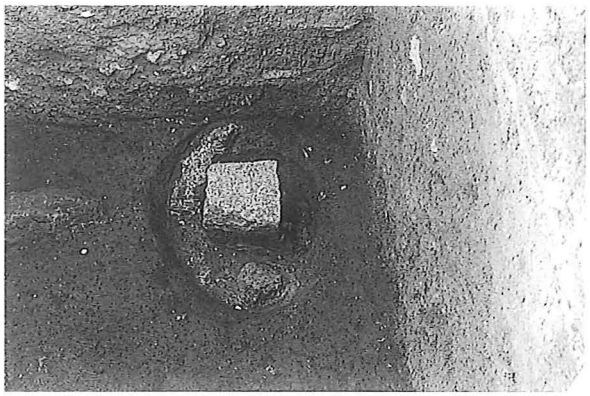


4　調査区全景②

5　SB08 ①（南から）

6　SB08 ②（南から）

図版２



1　N2 礎石（北から）

2　G4 石組み溝（東から）

3　V1（北東から）

4　V2（南東から）

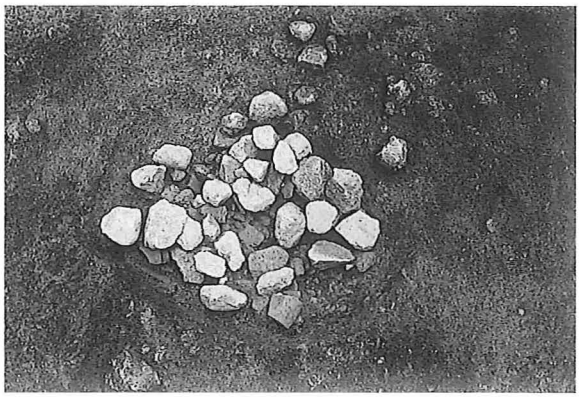
5　V2（北東から）

6　V2 遺物出土状況①（北東から）

7　V2 遺物出土状況②（北東から）

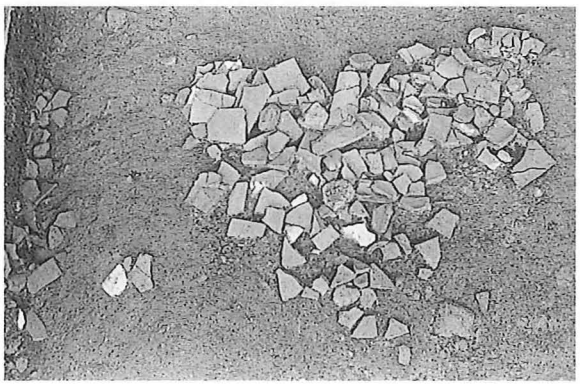
8　V2 遺物出土状況③（北東から）

1　SJ02（北から）



2　SK10（東から）

3　SY01（東から）

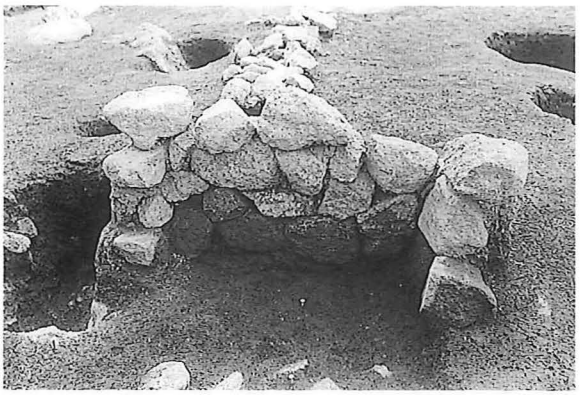


4　SY02（東から）

5　SH02，SJ04（北東から）

6　SH02（南から）

7　SH02，SJ04（東から）



8　SH02（東から）

図版４

1　SD05（北東から）

2　SD05（南から）

3　SD05（南東から）

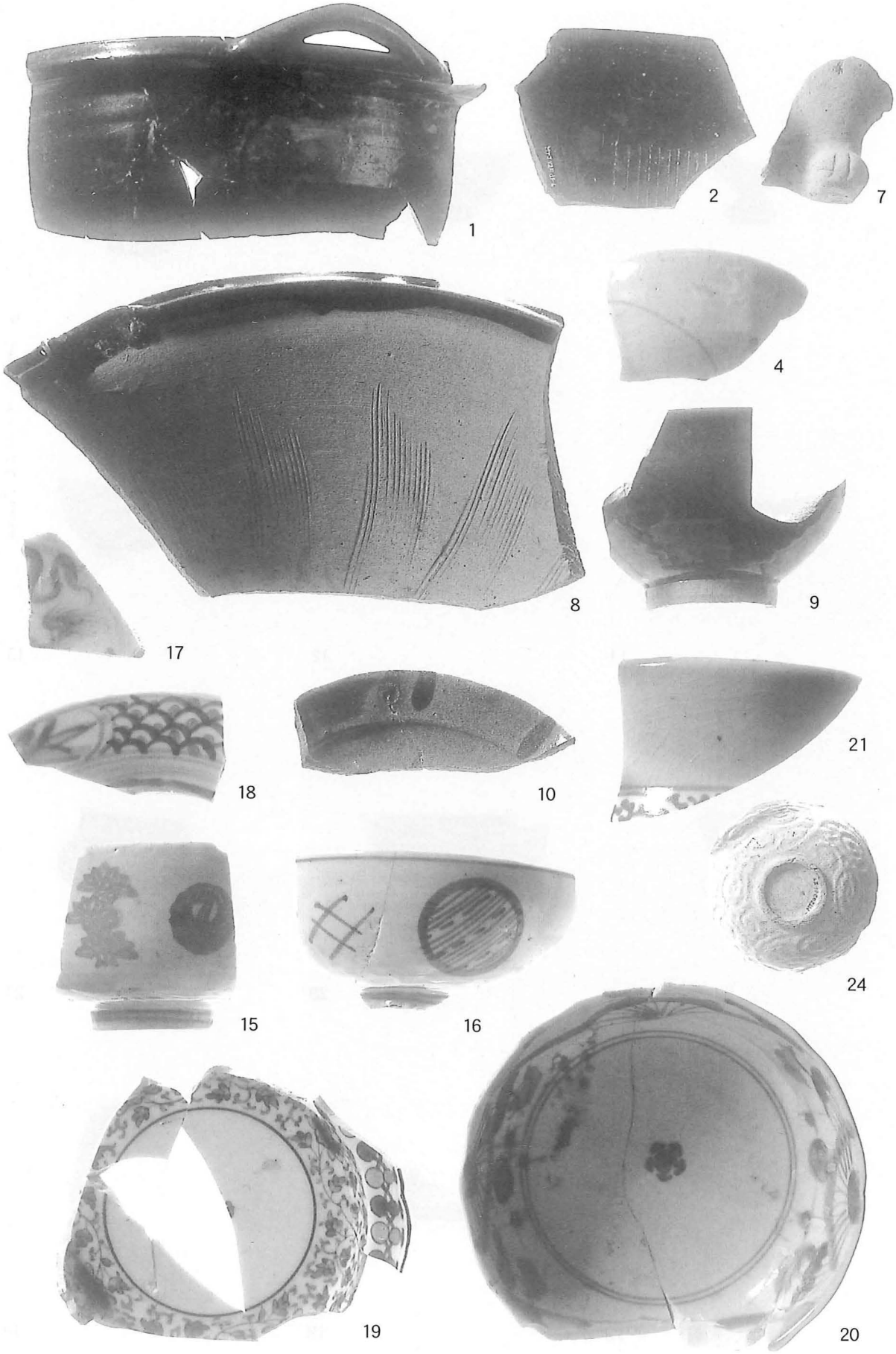
4　SD05，SK14（南東から）

5　SH03（南東から）

6　SH03（東から）

7　SB08，SA04（南から）

8　SB08，SA04（南東から）



森岳城跡出土陶磁器①　※番号は第24・25図に対応

図版６

3

5

6

11

12

13

14

20

21

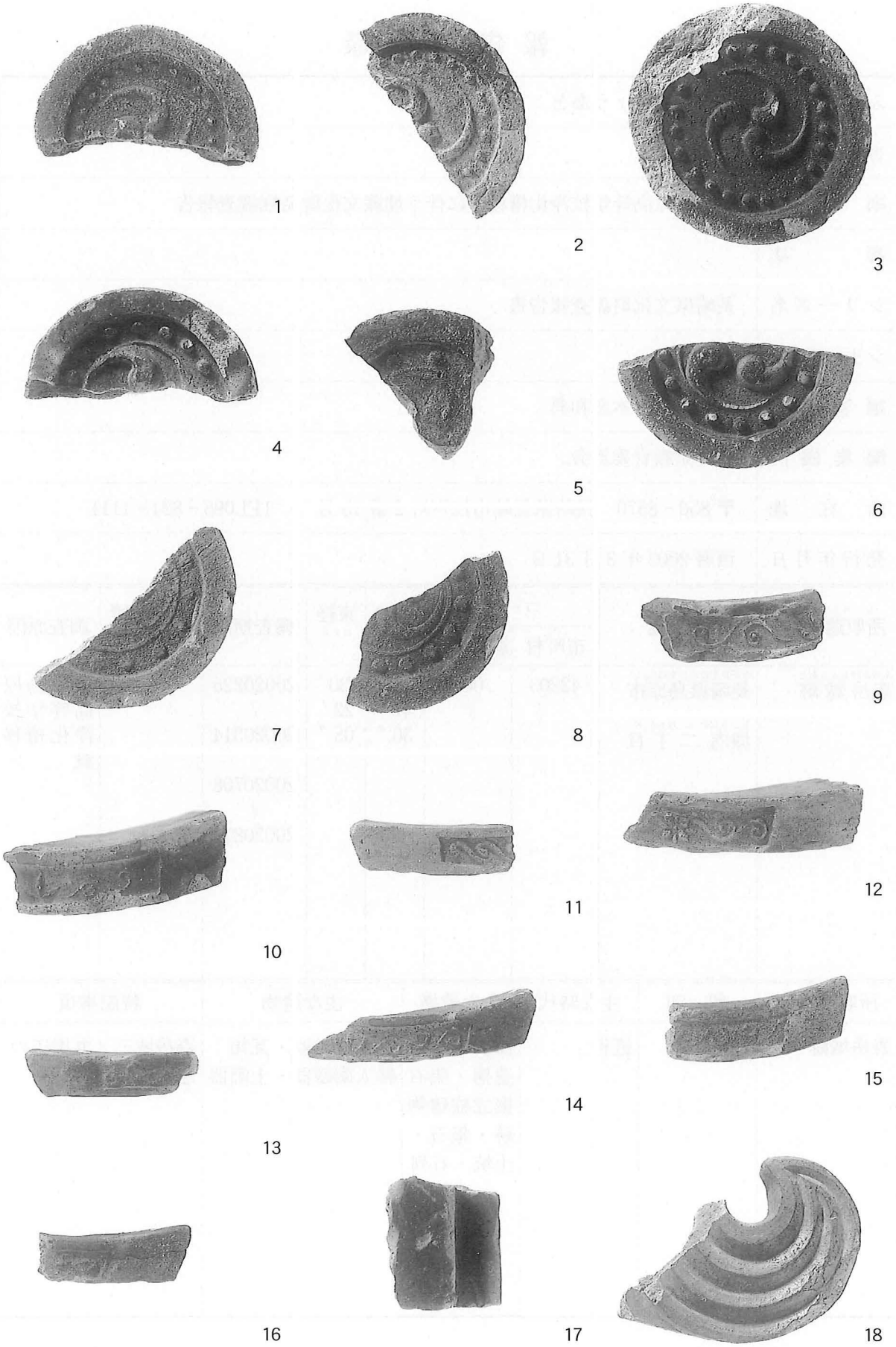
23

19

19

森岳城跡出土陶磁器②

※番号は第24・25・28図に対応



森岳城跡出土瓦

※番号は第27・28図に対応

報告書抄録

ふりがな	もりたけじょうあと
書名	森岳城跡Ⅱ
副書名	県立島原高等学校浄化槽移設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第173集
編著者名	本田秀樹・本多和典
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850－8570　長崎県長崎市江戸町2番13号　TEL095－824－1111
発行年月日	西暦2003年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
森岳城跡（もりたけじょうあと）	長崎県島原市（ながさきけんしまばらし） 城内二丁目（じょうないにちょうめ）	42203	003	32° 47′ 30″	130° 22′ 05″	20020225 ～ 20020314 20020708 ～ 20020813	356.2	県立島原高等学校浄化槽移設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
森岳城跡	城跡	近世	溝跡・石組遺構・集石掘立柱建物跡・集石・土坑・石列	近世陶磁器・瓦類輸入陶磁器・土師器	森岳城三ノ丸周辺の建物遺構

長崎県文化財調査報告書　第173集

森岳城跡 Ⅱ

平成15年3月31日

発　行　長崎県教育委員会
〒850－8570
長崎県長崎市江戸町2番13号
TEL 095－824－1111

印　刷　㈱クイックプリント
〒850－0034
長崎県長崎市樺島町8番12号
TEL 095－827－1318